

342-120

藤五代策編

普通教育
圖案新資料

東京目黒書店發兌

昭和
45. 5. 29
内交

普通圖案新資料

はしがき

圖案の巧妙を極めんには、先づ其の單位模様の便化法を攻究せざるべからず、單位模様とは、凡ての圖案を組成する處の一團形にして、即ち圖案の要素とも名づくべきものなり。

此の要素たるべき資料には、日用器具・玩具・武器などの如き人爲的のものあり、又動植物其の他の自然現象の如き自然的のものあり。然るに人爲的の資料より採りたる圖案は、多くは幾何學的にして變化に乏しけれども、之に反して、自然物を便化して成れる圖案は、頗る變化に富み、趣味も亦津々として盡くることなし。見よ彼の花卉の艷麗、果實の豊容、根莖の珍奇等は言ふも更なり、百獸の山谷に走り、禽鳥の天空を翔け、昆蟲の百花に戯れ、風伯の

波浪を蕩らし、彩雲の蒼穹に鬩ける、晚浦の漁舟、山村の水車、皆これ資つて以て圖案に適用して、吾人の趣味を満足せしむるものにあらざるはなし。近時美術工藝の進歩するに従ひ、各國何れも競うて自然界に於ける千變萬化の形態を意匠圖案の上に應用せんことをつとむるもの、蓋し故ありといふべし。

自然的資料中、特に花に付きては、古くより圖案に應用せられ、歐米にても、花語なるものありて、花によりて彼我の意志を表示すること盛んに行はれ、従ひて花卉を意匠圖案に適用することも廣く行はれたれども、獨り禽獸蟲魚に至りては、外國にても、我が國にても、之を採用せるもの甚だ尠し。故に本書は、動物に關しては特に多大の意を用ひたるものあり。

熟々現今の圖案者の爲す所を見るに、單に技巧にのみ奔りて、之が資料たるべき文學上の趣味、さては理學上の知識等の甚だ缺

如せるものあるが如し。此の故に其の作る所の圖案は、往々卑野賤劣にして、何等の雅致風韻なきものあり、これ豈圖案の本領ならんや。抑々圖案は、時として人々の複雑なる性格を表示し、事態の深遠なる消息を意味し、或は禍福吉凶の意をも包含せしむべきことあり。されば圖案者は、宜しく此等の知識を收得し、其の趣味を涵養し、變に應じ機に臨みて、千態萬狀の妙技を發揮せんことを心掛くべし。

余公務の餘暇を以て、此等の研究に従事すること年あり。頃日其の稿を集めて剞劂に附し、以て斯道の一端を裨補する所あらんとす。されど研究法未だ備はらずして、見聞の及ばざる所尠しとせず、願はくは大方諸彦の指教により、以て大成を異日に期せんことを。

明治四十五年一月三日

藤 五代 策 識 ず

凡 例

一、本書は圖案初學者の參考に資せんが爲に、普通の動物植物並に自然の現象等約一百種を選び、之を理學・文學・圖案の三方面の趣味に分ちて記述したるものなり。

一、動物物の形態及び性情に關することは、上野動物園・帝室博物館・小石川植物園等につきて、余が親しく研究せる處なり。

一、故事・傳説・詩歌・俳諧等に關することは、我女子高等師範學校圖書室及び上野圖書館備付の圖書數十部を讀破して得たる材料を經とし、余が思想を緯として編纂せるものなり。

一、圖案例は、古きは我が奈良・平安朝時代のものより、新らしきは現今流行のものに及び、且つ所々に歐米各國の新意匠と、余が新案のものとを挿入せり。

一、圖案の資料となるべき動植物の意味は、多く其の形状・性質より採れるものなれども、或は傳説等より採れるものも少からず。而して此等の意味は、國々によりて其の意を異にせるものあり、本書に載する處は、廣く我が國に行はるゝものを掲げたり。

一、圖案例は、一題目に付きて、四五種宛を掲げたるに過ぎず。されば圖案者は之に倣ひて、より以上の斬新奇抜なる圖案を案出せられんことを望む。

普通圖案新資料

目次

第一章 獸類の部

一 麒麟	一	九 狐	一七
二 獅子	三	一〇 猿	二〇
三 虎	五	一一 熊	二三
四 鹿	八	一二 猪	二三
五 象	一〇	一三 犬	二五
六 駱駝	二	一四 栗鼠	二七
七 兔	三	一五 鼠	二七
八 狸	五	一六 蝙蝠	三〇

一七猫……………三
 一八羊……………三
 一九馬……………三

第二章 鳥類の部

一 鶴……………三
 二 鳳凰……………四
 三 孔雀……………四
 四 雁……………四
 五 鴨……………四
 六 鶩……………四
 七 鴛鴦……………五
 八 鷺……………五

九 千鳥……………五
 一〇 鷹……………五
 一一 木兔……………五
 一二 雞……………五
 一三 鸚鵡……………六
 一四 雉……………六
 一五 鳩……………六
 一六 雀……………六
 一七 鶯……………七
 一八 杜鵑……………七
 一九 都鳥……………七
 二〇 燕……………七
 二一 雲雀……………七

二二 鳥……………八

第三章 蟲類の部

一 蝶……………八
 二 蜻蛉……………八
 三 蜂……………八
 四 蟬……………八

第四章 魚類の部

一 鯉……………九
 二 鯛……………九
 三 金魚……………九
 四 鮭……………九

五 鮎……………九
 六 鮒……………九

第五章 爬蟲類の部

一 龍……………一〇
 二 龜……………一〇
 三 蟹……………一〇
 四 蛙……………一〇
 五 蝸牛……………一一

第六章 植物の部

一 櫻……………一四
 二 梅……………一六

三松……………一三〇

四竹……………一三三

五槭……………一三五

六月桂樹……………一三七

七柿……………一三八

八橘……………一三九

九菊……………一四〇

一〇朝顔……………一四一

一一牡丹……………一四二

一二水仙……………一四三

一三百合……………一四四

一四燕子花……………一四五

一五蒲公英……………一四六

一六莖……………一四七

一七藤……………一四八

一八石竹……………一四九

一九蓮……………一五〇

二〇桔梗……………一五一

二一罌粟……………一五二

二二萩……………一五三

二三福壽草……………一五四

二四葵……………一五五

二五緒手卷……………一五六

二六虎耳草……………一五七

二七河骨……………一五八

二八酸漿草……………一五九

二九蔦……………一六〇

三〇蘭……………一六一

第七章 自然現象の部

一雪……………一六二

二月……………一六三

三雲……………一六四

四星……………一六五

挿畫目次

第一圖 獸類一……………一六七

第二圖 獸類二……………一六八

第三圖 獸類三……………一六九

第四圖 獸類四……………一七〇

第五圖 鳥類一……………一七一

第六圖 鳥類二……………一七二

第七圖 鳥類三……………一七三

第八圖 鳥類四……………一七四

第九圖 鳥類五……………一七五

第一〇圖 蟲類……………一七六

第一一圖 魚類……………一七七

第一二圖 爬虫類一……………一七八

第一三圖 爬虫類二……………一七九

第一四圖 植物一……………一八〇

第一五圖 植物二……………一八一

第一六圖 植物三……………一八二

第一七圖 植物四……………一八三

第一八圖 植物五……………一八四

第一九圖 植物六……………一八五

目次

第二〇圖 植物七……………一五—一五

第二一圖 植物八……………一五—一五

第二二圖 植物九……………一六—一六

第二三圖 自然現象……………一七—一七

目次終

普通教育圖案新資料

藤 五代 策 編

第一章 獸類の部

一 麒麟

理學上の趣味 麒麟は支那古代に於ける假想的靈獸にして、實際此の物の生存せしに非ず。唯アフリカに産するジラッフと云へるは、いはゆる麒麟なるものに似たる所あるを以て、これを呼ぶに麒麟の名を以てせり。ジラッフは鹿に似たり、首は細くして長く、頭上に角を戴き、體は短く脚は頗る長し、爪は牛に似て、雙蹄なり、身の丈け十五六尺に達し、毛皮は褐色にして所々に斑紋あり。

第一章 獸類の部 麒麟

り、性穩和にして人を害せず、好んで蔬菜を食ふ。明治四十二年上野動物園に於てもこれを飼養せられしが、氣候の適せざるにや、半歳ならずして、牝牡ともに死したり。現今帝室博物館内に保存せらるゝ剝製のもの即ち是なり。

文學上の趣味 假想的の麒麟は、最も靈妙のものにして、聖人の世に出づる瑞祥なりとせり。通常繪に描けるものは、體軀鹿に似て、一角を有し、尾は牛の如くにして旋回せり、毛は赤・青・黄・白・黒の五色を具へ、蹄は馬の如く、腹部より所々に火焰を纏へる様、いかでもいふかきものなり。

この獸は性、生草を履まず、生物を食はず、仁を好み、義を愛し、行歩規に依り、折旋矩に中り、音鐘呂に合ひ、陷穽を犯さず、罔害に罹らず、又群居せず、旅行せずといへり。俗に麒麟兒といふは、兒童の群に傑出したるをいふなり。

○仁義の意、非凡の意に用ふ。

二 獅子

理學上の趣味 獅子は、體軀の長さ五尺餘にして、尾は二三尺に達し、頭部は頗る大きく、四脚頑強なり、毛は一般に短けれども、頭より胸の邊にかけて、長さ淡黄色の領毛を有し、尾端には黒褐色の毛總を具へたり。

此の獸は晝間岩洞等に潜み、夜間出で、食を索む。他獸を襲撃せんとするときは、豫め地に伏してその近づくを待ち、忽然躍り出でて組み付くを常とす。その咆哮するときは、百獸ために畏服し、虎の猛といへども、總身縮みて地に仆れ、空飛ぶ鳥は大地に墜落し、水中の魚は深淵に潜没すといふ、其の猛勇實に恐るべし。されども火を怖るゝこと甚だしきが故に、印度の山中に棲む土人

は、夜間火を焚きて以て獅子の近づくを防ぐといふ。

文學上の趣味 虎若し獅子に遇へば、直ちに地に仆れ、四肢を空にし、口を開き、目を閉ぢ、恰も死せるものゝ如き態を爲して毫も動かず、獅子是を見て、開きたる口に溺し、徐に他に行くが故に、やがて五六町許りも隔たりたるを待ち、虎は、眼を開きて獅子の後を覗ひ、いよく、他に去りしを識れば、則ち起きて脱兎の如く逃げ去るといふ。故に支那にては、**漉瓶**のことを虎口と呼ぶとぞ。

今は昔、天竺の或國王、王女を従へて獅子狩せしに、偶、一頭の牡獅子現はれて王女を奪ひ去れり、程經て、王女姪みて獅子を産みしかば、王妃是を悲しみて、武臣をして、漸く王女を奪ひ返し、に、親獅子の悲泣すること甚だしく、悲鳴をあげて國中を荒れまはりしを以て、王詔して遂に親兒の獅子を討取らしめたりきとぞ。獅子は百獸の王と稱へ、物の主體にたとへられたり、ライオン齒

磨の如きは、全く此の意よりとれるものなるべし。

○猛烈物の主位等に用ふ。

三 虎

理學上の趣味 虎は、高さ二尺四五寸にして、身長五尺に達す。大さは黃牛の如く、毛は黃色にして、全身に黒紋を有せり、尾は二尺餘、黒輪を帯び、爪は鉤りて鷲の爪の如く、齒は一般に細けれども、かけ牙のみは長さ一寸に餘り、舌は大人の掌を擴げたる程の大きさあり、逆立ちたる鬚を生じ、硬くして光れり、眼光甚だ鋭く、夜間之を見れば恰も星の如し。

虎は朝鮮に多く産し、其の皮は敷物として尊重せらる。往時は五位以上のものは、虎皮を用ひしことありし故に、今も書翰の封筒に虎皮下など、書するは、高位の人を尊ぶの意なり。

文學上の趣味 とらは、とらふるの意にして、人をとらふること
多きが故なりと。

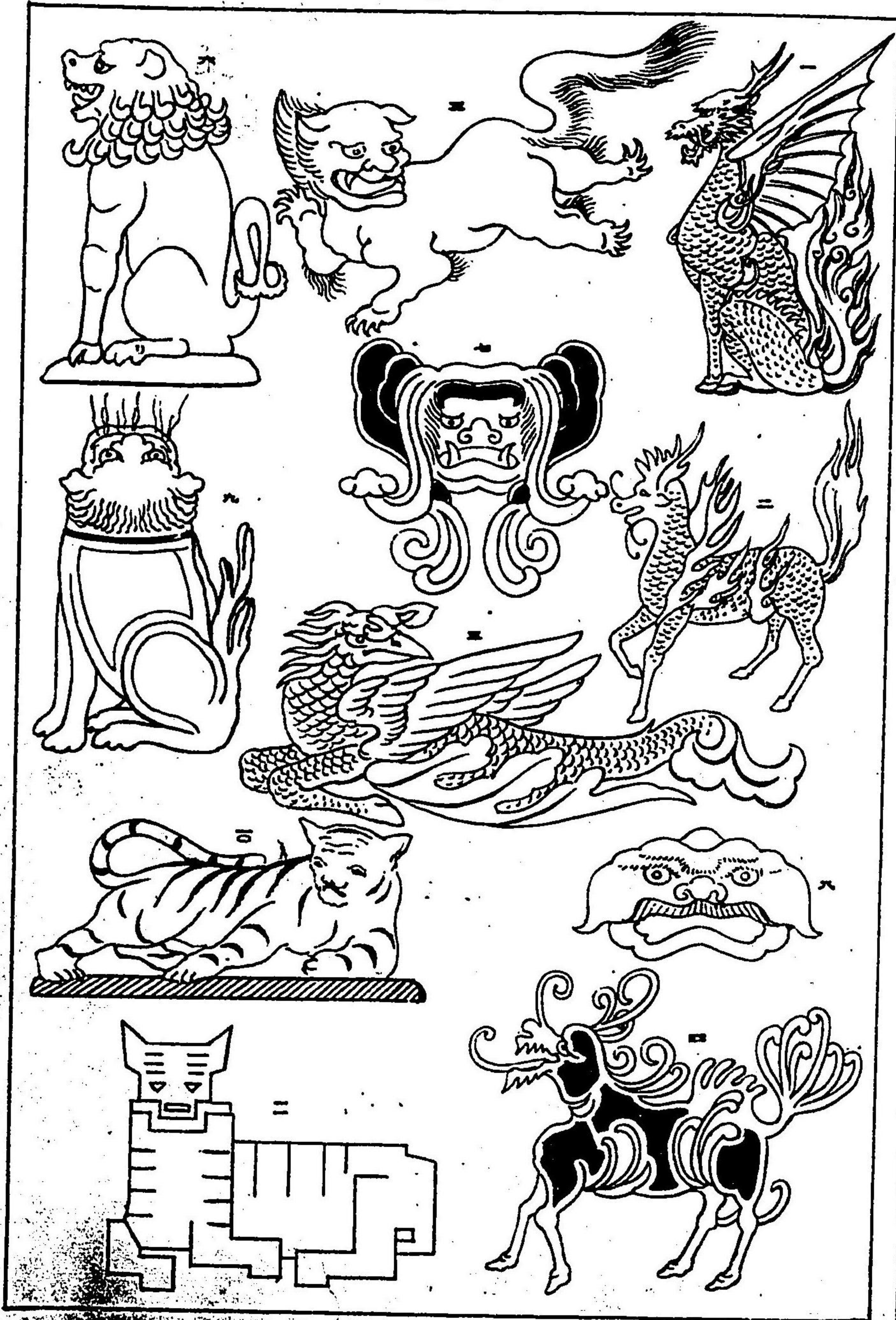
清正が大虎をかりしこと、膳臣巴提便が、大虎を一撃の下に瘡
し、ことなどは、聞くだに身の毛よだつ心地ぞするなれ。

島津義弘朝鮮在陣のとき、其の馬卒某、虎に襲はれ、遂に、銜へら
れて深山に入り、恰も猫の鼠を遊ぶが如く玩ばれぬ。馬卒は面色
失せて土の如くなりしが、虎も亦疲れて、やがて馬卒の上に臥し
ぬ。少時ありて馬卒神氣を恢復し、虎を撫でしに、彼れ愈、熟睡して

第一圖

- (一)(二)(三)(四)は麒麟にして(一)は東京市日本橋に裝飾せるもの(三)は教育博物
館に陳列せる佛國圖案なり(五)(六)(七)(八)(九)は獅子にして(七)は正倉院の藏品
- (八)は手掛け(九)は香爐なり(二)(二)は虎の圖案なり。

圖一第



野を發せり、此の機逸すべからずと、直ちに腰に付けたる細引を
解き、臥ながら虎の陰囊を括りて、傍なる大木にしかと結び付け、
逸早く逃げ歸り、同輩を語らひ來りて、之を驚かし、に、虎大いに
怒りて、前なる岨に飛び上らんとする機に、陰囊を破りて即死し
けり、則ち其の皮を剥ぎて主君に獻ぜりと。今も尙島津家の重寶
の一として保存せらるるといふ。

あさちふの小野のしの原いかなれは 讀 人 不 知

手かひの虎の伏床なるらん

もろこしの虎ふす島もへたつらん 寂 蓮 法 師

思はぬ中のおときけしきは

○捕獲の意なり。

四 鹿

理學上の趣味 鹿は、我が國固有の獸にして、體軀の形、馬に似て瘦せたり。尾は甚だ短く、脚は細長し、毛は黃褐色を呈し、脊に沿ひて一條の黒線を有し、且つ全身白き斑紋を點ぜり、牡は角を有すれども、牝にはなし、この角は、春生じ、冬に至りて脱落するものなり。

鹿の鳴くは妻を戀ふるなり、故に牡鹿は鳴けども牝鹿は鳴かずといふ。常に穀菜を食とし、四五月の頃、子を産む、肉は美ならず、其の角は加工して種々の裝飾に用ひられ、若き角は、とりて藥用に供すと云ふ。

文學上の趣味 鹿を春日の神の使と謂へるは、第一殿は鹿島神にておはし、此の神幸したまふとき、鹿に乗らせ給ひし故事によれるなりとぞ。今も尙奈良・嚴島には多く飼養せり。鹿の肩灼といへるは、鹿の肩骨を焼きて卜することなり。鹿笛一名しふえと

いへるは、鹿の耳皮又は腹ごもりの皮を用ひて作れる笛にして、之を吹くときは、牡鹿は牝の鳴聲と誤認して慕ひ集まるといふ。和歌に「松の火串」又は「火串の松」と詠めるは、五月の比、暗夜に松をともして串となし、其の光輝きて鹿の眼に映れるを的として射るより、此の串を斯く呼びしなり、さればこれを照射ともいへり、

奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の 讀人知らず

聲きく時そ秋はかなしき

山里は秋こそことに佗しけれ 忠 峯

鹿のなく音にめを覺ましつゝ

秋はなほ我が身ならねと高砂の 能因法師

をのへの鹿も妻を戀ふらし

妻戀ふるさをしかの音に小夜更けて 小野小町

身のたくひをもありと知りぬる

○妻慕、悲哀の意あり。

五 象

理學上の趣味 總身灰色にして、胴の長さ七尺より八尺に達し、廻りは一丈餘あり、足は太くして短く、頭は顧廻する能はず、鼻は三尺より四尺に達し、周り一尺四五寸あり、末端に鼻孔二つあり、端深く凹み、自在に開闔す、中に小さき肉爪ありて、よく針をも拾ひ、芥子をも摘むことを得べし。又水を飲み、酒を嚙るにも鼻を以てし、食するときは鼻を以て食物を捲き取る、而して全身の力はすべて鼻に集め、起ちて行かんとするときにも、先づ鼻にて地を控へて後脚を延ばす。口は頤に隠れてよく見え、眼は極めて小さく、耳は甚だ大なり。性溫良にして人に馴れ易く、子守などなすことあり。印度地方にては、象に騎りて虎狩を行ふといふ。

文學上の趣味 象をきさといふは、其の牙に文あるに因り、又

牙をきさのきともいふ。

いかりゐの石をくゝみてかみこしは す け み

きさのきにこそおとらさりけれ

應永のころ象始めて我が國に來れるを

中御門院の御製

時にあれは人の國なるけたものも

けふ九重にみるかかなしさ

めつらしくみやこにきさのからやまと 靈光院法皇

過ぎしの山はいくちさとなる

なさけあるきさのすかたよから人に

あらぬやつこの手にもなれきて

○溫順、無邪氣の意なり。

六 駱駝

理學上の趣味 高さ五尺、長さ八九尺に達し、頭は小にして頸長く、耳は至つて小なり、頸の下には總狀の毛を垂れ、脊には二個若しくは一個の肉瘤隆起して形鬼頭の如し、前脚の股部にも毛を蓬生す、されど後脚には別に長き毛あり、爪は二つに分れたれど、牛の爪の如く圓からず。この獸古より奇畜と呼ばれ、一度飽食すれば數日喰はず、又よく渴を忍ぶといふ、殊に濁水を好み、重荷を負ふに堪ふるが故に、沙漠の船として使用せらる。而して重荷を負ひたるまゝ坐し、若し甚だ重ければ起たず、よく水泉の地を知るを以て、沙漠を旅行する人には最も貴重なる動物なり。唐代には驛毎に明駝使といふものありて、邊塞の用に當てたり、壽は五十といへども、往々百歳に達するものありといふ。

文學上の趣味 駱駝は馬を惡むこと甚だし。昔某國の戰に駱駝を使用せしかば、敵の馬皆其の聲に怖れて進まず、敵兵止むなく遂に步戰せりといふ。

首はつるからたは龜にさも似たり 加 茂 季 鷹

千秋らくた萬さいらくた

からうたを出てらくたもたんさくの 眞 顔

三つにをれたるあしはらの國

○廉耻心の意に用ふ。

七 兎

理學上の趣味 形態鼠に似て大きく、毛色は褐色なれども、冬季降雪多き地方にては白色に變ず。耳は長くして聽覺鋭敏なり、尾及び前脚は短く、後脚は頗る長し、故に山上に駆け登ること迅速

にして、犬と雖も追従すること能はざれども、降るときには僅に身を轉げ落つるのみ。目は卓く、長鬚を有し、口は缺けたり。尻に九孔を具ふといひ傳ふれども、實は糞尿の二孔を見るのみ。

兎は人家にちかき山野に住む、人家に飼はるゝは南京兎なり。南京兎は子を産むこと多きが故に、近時養兎業盛んに行はるゝに至れり。肉は冬期に於ては鳥肉の美味に劣らず、毛は筆に作るべし。或種の兎の中には、穴を三方に掘りて其の中に住み、敵の方より覘くを識れば、巧みに他方より逃げ出づるものありといふ。

文學上の趣味 兎は明月の精なるが故に、雄なく、月を望みて孕むといへども、そは信ずべからず。又月の中にては兎の餅搗くなど古來より言ひ傳へたり。又兎波を渡るの話は、太古大國主命の事蹟中にありて、面白き昔話の一たり、此のこと歌に詠まれ、繪に

描けるもの多し。徳川幕府のとき、正月元旦の吉例として、兎を羹となすこと行はれたれど、其の後鮮鯛を以て之に代ふるに至れり。

萬葉集

とやの野に兎ねらはりをさくも
ねなへ子ゆるゑに母にころはえ
慈鎮和尚

なにとなく通ふ兎もあはれなり
かたをか山の庵のかきねに
定家卿

露にふすうの毛のいかにしをるらん
月のかつらの影をたのみて

○明月の意、又吉例の意なり。

八 狸

理學上の趣味 狸は狐に似て、頭圓く、尾大にして短し、毛は黃黒

を雜ふ、多くは山谷に穴を穿ちて棲息し、狐と同じく人家に近く
來りて鷄、鴨、穀類などを竊み食ふ。肉は食ふべく、毛は筆に用ひ、皮
は鞆に用ひてよし。

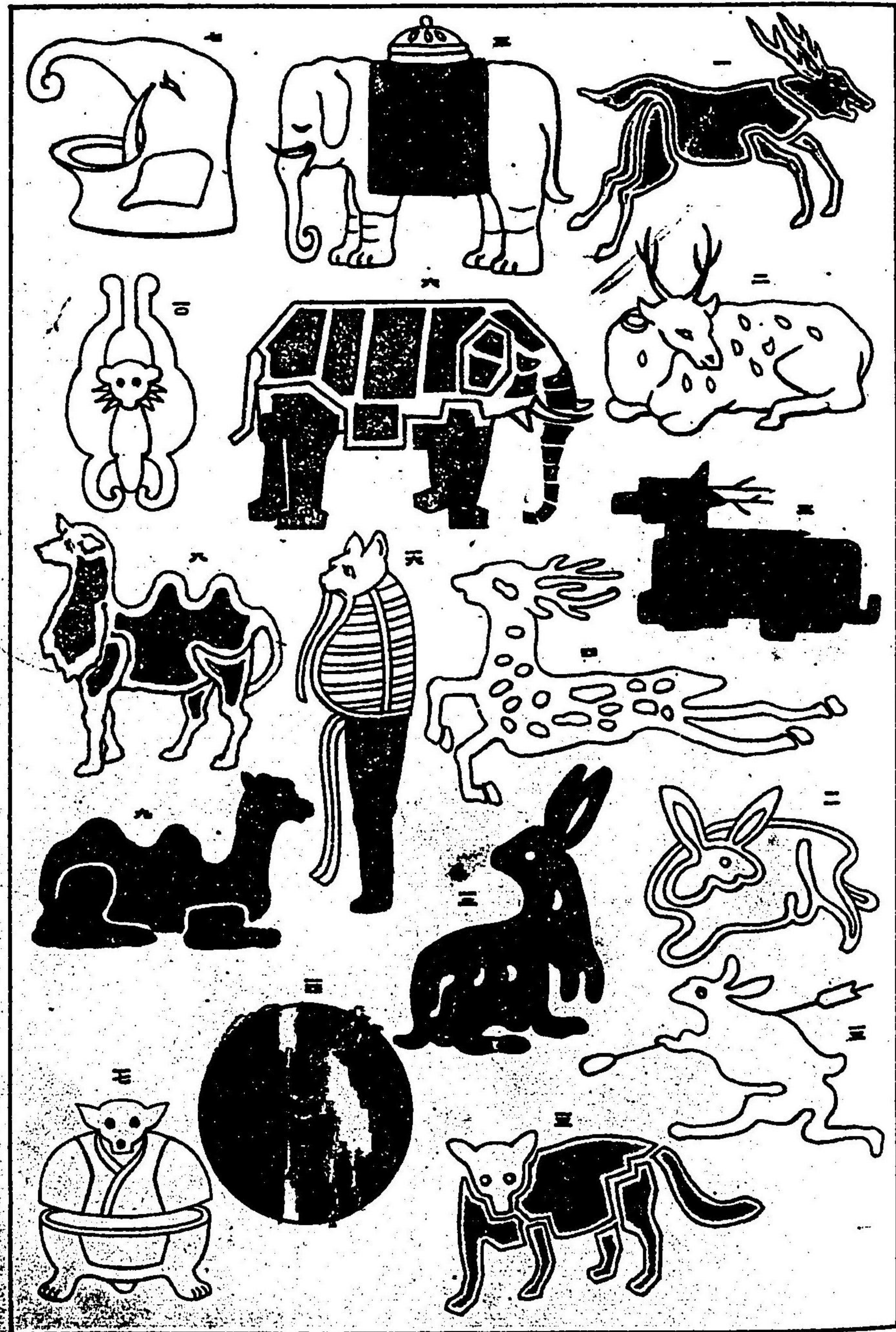
文學上の趣味 たぬきは其の皮手貫とするによろしきより、此
の名を附したるなるべし。

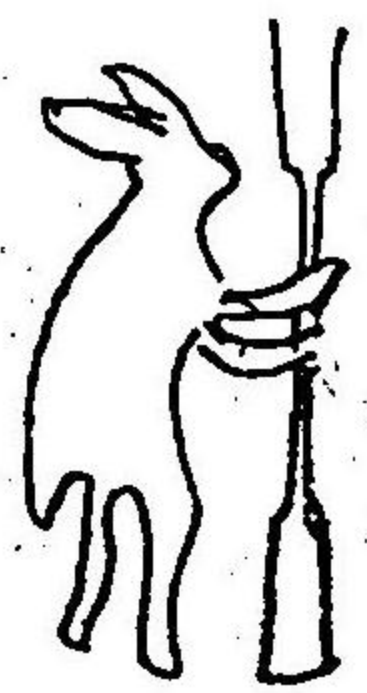
古來狐はよく婦人に化けるといひしが、狸の法師に化けし怪
談亦多し。泉州堺の小林寺、上州館林の茂林寺等には、狸法師の筆

第二圖

- (一)(二)(三)(四)は鹿の圖案(五)(六)(七)は象にして(五)は表慶館陳列の香爐(七)は最新
- 流行のインク瓶なり(八)(九)は駱駝にして(九)は筆架なり(一〇)(一一)(一二)は兎に
- して(一〇)は箱の摘みなり(一三)(一四)は狸にして(一四)は教育博物館に陳列せる英
- 國圖案(一五)は表慶館陳列の香合なり。

第二圖





蹟なりとて、今尙傳へられたるものあり。又白雲子といへる狸の
蘆雁の圖は、寫山樓に藏めたり。此の他良恕と云ふ老狸の描ける
寒山拾得の畫は、耽奇漫錄中に縮本として載せらる。何れも珍奇
無類のものなり。

狸のかくし袋は、八疊に擴がるといひ傳へ、文福茶釜のお伽噺
は兒童の喜ぶ所なれども、果して狸に此の奇術ありしや否や。
天下安らけく治まれる御代には、狸出で、腹鼓を打ちつ、泰
平を祝ふといふ。このこと繪畫詩歌に上れるもの多し。

人すまてかねも音せぬ古寺に

寂蓮法師

たぬきのみして鼓うちけれ

○滑稽の意なり。

九 狐

理學上の趣味 犬に似て、尾は太くして長し、毛は普通赤褐色なれども、北海道には黒色の狐を産す。又北極狐といへるは白色なり。昔時の傳説中に所謂白狐とは、蓋し此の種ならんか。皮は鼓を張るに用ふべし。

多くは人家に近き山野に棲み、晝間と雖も出でて人家の邊を徘徊し、鶏等を捕ふることあり。其の聲憂ふるときは小兒の叫ぶが如く、喜ぶときは壺をうつに似たり。故に或地方にては、其の聲によりて吉凶を卜すといふ、或は狐の聲を聞けば凶事ありともいひ、又その姿を見れば吉事ありともいへり。性極めて猜疑にして、人之を逐へば、歩毎に顧回して逃ぐ。其の様實に悪むべし。

文學上の趣味 傳説によれば、白狐は幾百年を経たるものにして、靈妙不思議の術を演じ、或は化して命婦となり、或は忠臣義士に變じて、謝恩復讎など働らきしとの怪談少からず。彼の九尾の

妖狐化して窈窕たる姐妃となり、紂王を誘惑し、夫より我が國に渡りて、近衛帝の宮嬪玉藻前に變じたりしが、後ち退治せられて石に化したるもの、即ち那須ヶ原の殺生石なりとて、世俗の不思議の一に數へられたり。下野なる玉藻稻荷は、この妖狐を祭れるものなりとかや。

狐を稻荷と呼ぶ所以は、世俗狐を稻荷の神使なりといふより、起りしものなるべし。

狐火といふは、余も曾て見たることあり、こは狐の口より火を放つなりといふ者あり、又狐が人の髑髏、牛馬の骨、又は長く土中に埋もれたる木株等を口に銜へて打ち振るが爲に、火を放つなりと云ふものあり。何れにすとも、怪しきの限りなり。

孔子は「怪力亂神を語らず」といへり。余も亦之に倣ひて、多くを言はず、世の識者の判断に任せんのみ。

夜もあけはきつにはめなんくたかけの 伊勢物語

またきになきてせなをやりつゝ

夏はきつねになく蟬のから衣 北條氏康

をのれくか身の上にかよ

○狐疑の意なり。

一〇 猿

理學上の趣味 形態最も人に近似し、四肢ともに物を握る用を
なす、又後肢のみにて歩行するを得るなり。普通の猿は尾短か
けれども、をながざると云へるは、尾甚だ長し。齒は鋭くして、果物
を食ふに適せり。

猿は我が國の深山に於て往々見ることあり。體軽く、四肢よく
働くが故に、高きに登ること妙なり、性極めて輕躁なるも、無邪氣

にしてよく人の眞似をなすが故に、種々の藝を教へて使役する
ものあり。又よく恩義を忘れずと云ふ。古より猿の恩に報いし佳
話妙からず。

文學上の趣味 さるは躁ぎ動くの意にして、心の靜かならざる
より、此の名を付したるなり。

「見ざる、聞かざる、言はざる」の教は、世俗の訓誡として、繪畫に彫
刻に、多く見る處なり。

花のさくかけにはよせしひく猿の 猿 牽

枝をゆふらはちりもこそすれ

ちく生もつかひいるれは中々に 猿 牽

われにはましの能のおほさよ

深き夜の深山かくれのとのゐさる 信實朝臣

ひとりおとなふ聲のさひしき

こするより来てこそほゆれ犬櫻
花さかりむなしき山になく猿の

讀 人 不 知
定 家 卿

こゝろしらるゝはるのつきかけ

○無邪氣、人真似の意なり。

一一 熊

理學上の趣味 本邦にては、木曾山中に殊に多し。高さ三尺、身長五六尺に達す、通常全身黒けれども、或は黄白なるあり、喉下に白紋ありて、半月形をなす、俗に之を月の輪といふ。四肢は人の如く、よく木に登るを得、或は後脚のみにて歩行することあり。性勇猛にして、人を害することあり、されど兒熊はよく人に馴る。膽は熊の膽とて、頗る苦味あり、胃病によろし。

文學上の趣味

身をすてゝ山に入りにし我なれば 讀 人 不 知

くまのくらはんこともおほえす

あらくまのすみける谷をとなりにて 讀 人 不 知

みやこに近き柴の庵かな

奥山にすむあらくまの月のわに 衣笠内大臣家良

よめこそいとくもらさるさめ

○勇猛の意なり。

一二 猪

理學上の趣味 形態豚に似て、高さ二尺四五寸、身長五尺に達し、胴肥えて頭尖り、鼻は著しく凸出せり、毛は半黒白色を交へ、脚は小さくして短く、雙蹄を具ふ。肉は脂肪に富み、極めて美味なり。冬に至れば深山に入り、坑を穿ちて、之に木葉・茅・蘆を布き、其の

中に蟄居して寒を凌ぐ。四五月頃妊み、一産に十二三頭を生む。肉は能く痔血を止め、又小瘡を癒すといふ。猪は前に進むことのみを知りて、退くことを知らざるが故に、向ふ見ずのものを猪武者とは云ふなり。

文學上の趣味 別名ふすゐの床といへるは、冬期久しく地中に床を造りて蟄居するが故なり。

伊吹山の守神白猪となりて日本武尊と相見え、又怒猪出で、香坂王を咋ひ殺し、或は仁田四郎が富士の卷狩に大猪を捕へたるなどは、人のよく知る處なり。

かるもかきふすゐの床のいをやすみ 讀 人 不 知
さこそねさらめかゝらすもかな

おとろかぬ伏ゐの床の眠りかな 後 京 極 攝 政
さらても夢に過る此の世を

おく山のふす猪の床やあれぬらん 後 鳥 羽 院 御 製

かるもゝたえぬ雪のした葉は

○安眠、又は猛進の意なり。

一三 犬

理學上の趣味 犬の形態は人の能く知る處なれば茲に説かず。性人に馴れ易く、能く奔り、能く泳げども、木に攀づること能はず。よく眠れども速に醒む、其の嗅覺と聽覺とは殊によく發達せり。極めて伶俐にして、主家に對する忠實・順從・親愛・畏敬の念のこまやかなる、家畜中第一とす。割合に長壽にして、中には年齢二十に達するものあり。樺太にては、犬をして橇を曳かしむと云ふ。
文學上の趣味 いぬの尾は、ゑのころ草に似たれば、犬をゑのこともいふなり。

山里はひとのかよへるあともなし 定 家 卿

よのこ草ほへかゝるこそ道理なれ

あたりに近き狐亂菊 玄 旨 法 師

さよふけていそくきぬたのあたりまで

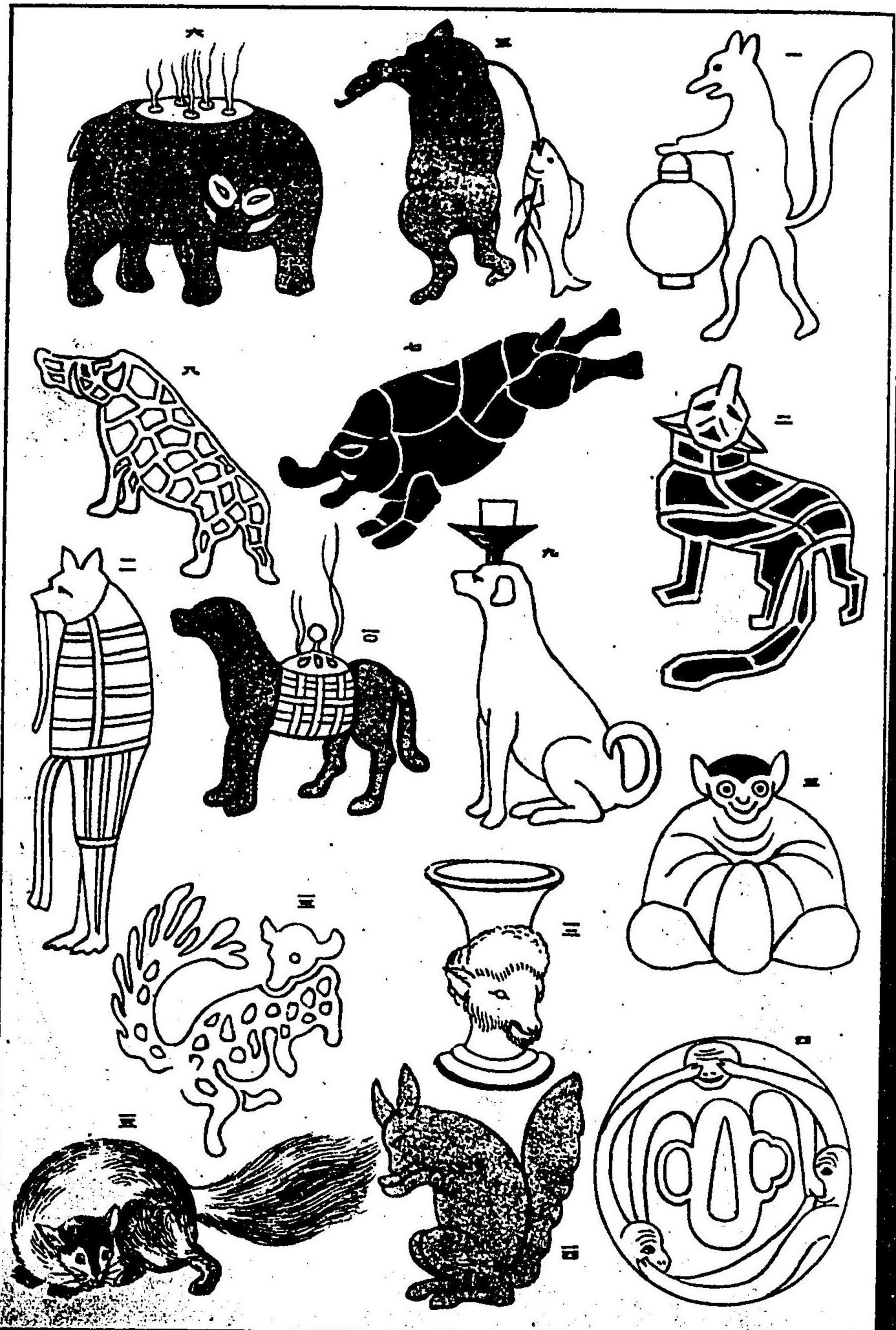
うたてもさらぬ里の犬かな 藤 原 爲 顯

○忠實の意なり。

第三圖

(一)は狐(三)は表慶館陳列の猿の置物(四)は刀の鍔にして見猿聞か猿言は
猿を裝飾せるもの其の巧妙實に驚く可し(五)(六)は熊(六)は香爐なり(七)(八)は
猪(九)(二)(三)は犬にして(三)は教育博物館陳列の外國食器圖案(三)(四)(五)は栗
鼠なり。

第三圖



一四 栗鼠

理學上の趣味 家鼠よりも大きく、毛は黒褐色にして、尾は粗大なり。齒は勁く鋭くして鑿の如し。

性寒を畏れ、暖を喜び、常に樹木の洞穴に棲む、温かき日、飽食せし後は、石上又は樹梢に踞立して、自ら尾毛を被ひて身を匿す、其の様愛すべし。好みて栗・柿・胡桃・葡萄等の實を食ふ。身軽きが故によく飛躍す。

文學上の趣味 別に記すべきことなし。

○避寒の意なり。

一五 鼠

理學上の趣味 形態兎に似て小さく、毛は青・黒に白色を帯ぶるものと、白色のものがあり、齒は鑿の如く鋭くして、よく器物を切

るに適す。鬚は長く、眼は露出し、尾は頗る長し。

世俗に、鼠は一時に十二子を産むといひ傳へり、蓋し繁殖の夥しきを意味するなるべし。又白鼠を飼ふ家には、黒鼠棲まずと、故に白鼠を福の神とも呼ぶものあり。

文學上の趣味　ねずみは、ぬすみの轉訛せるものなり。人の寝ねたる後出でて物を盗み食ふ故に、寢盜の義をとりて、ねずみと呼ぶに至れるなり。

鼠のことをよめ又はよめが君と呼ぶ地方あり、されば其角の句にも、

明る夜はほのかにうれしよめかきみ

とあり、又狐の嫁入に對して、鼠の嫁入といふことあり、是は鼠の異名をとりて作意したるものならん。或人荻生徂徠に問ひけるは、鼠の嫁入といへる冊子に、道具持の宰領につきたる侍の鼠の

名を、棚渡仲右衛門といふあり、こは何かの據ありてやと。徂徠應へて曰く、そはどぶ鼠の仲間が出世して足輕になりたるものにて、鼠壽三百歳則色白善憑人而下名曰仲といふことあり、その侍鼠も年經しからに、名をば仲と呼べるなりと。人其の博識に服せり。

肥後國と天草島との間なる海上に、鼠島とて小さき島あり。鼠のみ夥しく殖えて人住まず、此のあたりにては、猫の皮もて張れる三味線を禁ぜり、蓋し島神たる鼠神の惡むが故なりとぞ。

世をしのふ心のうちのあなねすみ　土御門院御製

やすく出つへき道もあるらん

のとけかれ月のねすみよ露の身を　清輔朝臣

やとす草葉のほともなき世に

○竊盜又は小心の意に用ふ。

一六 蝙蝠

理學上の趣味 形鼠に似て、灰黒色なり、口は大きくして、細齒上下に並び、薄肉の翅を具へたり。前肢は鈎状をなして、翅の肩にあり、後脚は鼠の脚の如し、毛ありて五趾を有す。

蝙蝠は常に樹木の古穴に入りて蚊を索め喰ふ、又山椒酒を好むが故に紙片に酒・蚊などを包みて、黄昏空中に投げ上ぐれば、蝙蝠は之に應じて落つべし、その棲止するや、鈎を小枝等に懸けて倒垂す、若し人の手足に咬みつくときは、容易に離れずと云ふ。

文學上の趣味 一名かはほりともいふ、蚊を欲するの意なり。諺に「蝙蝠の二心」といへることあり、こは昔獸群と鳥群との大合戦ありしとき、蝙蝠は己の翼の鳥に似たると、體軀の獸に類すると

を利用して、常に優勢の側にのみ味方せしかば、遂に雙方より擯斥せられたりとの物語より起れるなり。

昔、或人士藏の雨受を修繕せんとして、一枚の板の上より釘を打ちつけたり。其の後三年を経て、再び此處を繕はんとせしに、先年打ちつけし釘の下に、一匹の蝙蝠ありて、翅を釘に貫かれ、あはれ瘦せ細りて、僅に露の命を繋げるを見たり。さて、こは三年の久しき、如何にして食を得しかと、人々不思議に思ひける程に、少時くありて、他より其の配偶者ともおぼしきもの飛び來りて、餌を運び與ふるを見たり。かゝれば、人皆其の夫婦の情愛の深きに感じ、涙を流さざるものなかりき。家人等も之を最と憐れがりて、靜かに蝙蝠を取り放ち、其の穴を塞がずして、長く此の蝙蝠の棲穴に充てけるとぞ。

人もなく鳥もなからんしまにては

和泉式部

このかはほりも君もたつねん
うらさひて鳥たに見えぬ島なれば

讀人不知

このかはほりて嬉しかりける

○二心の意なり。

一七 猫

理學上の趣味 形態虎に似て小さきが故に、手がひの虎ともいふ。其の瞳子日中は絲の如く細くなれども、夜間は圓大となる。毛色は一樣ならず、赤・白・黒の三種を交へたるを三毛猫といふ。舌は荒鏝の如く、齒と爪とは銳利にして、肉食に便なり。

好んで鼠を捕へ喰ふ。其の鼻端は常に冷やかなれども、盛夏の候一日だけ温かなりといひ傳ふ。猫は熱き物を食せざるが故に、熱き物を食せざる人を猫舌などといへり。

文學上の趣味 ねこのねは鼠にして、こは好むの意なり。即ち鼠を好むよりこの名を付せられたるなり。

諺に猫根性といへるは、人の貪慾の心を匿して外に露はさざる者にたとへたるなり。

説苑に「君子愛口虎豹愛爪」と見えたり、「鼠とる猫は爪を隠す」の諺と意通じて面白し。

猫の化けし物語は、往々各地に聞く所なり。或は飼猫が死せる愛兒に化けて、毎夜母の乳を吸ひし物語、或は妾に化けて御家を騒がせし嘶等、世に傳へられたるもの多し。彼の犬の忠實なるに反して、猫の陰險なるは、實に惡むべきの限りなり。

餘所にたによともしらぬ野ら猫の 寂蓮法師
なく音はたれに契おきけん

まくす原したはひありく野ら猫の 源 仲 正

なつけかたきは妹かこゝろか

○奸悪又は陰険の意なり。

一八 羊

理學上の趣味 形態驢馬よりも小さく、犬よりも大なり。毛は多くは淡褐色なれども、白色のものもあり。頭は略々馬に類して短く、喉下より胸に至りて長毛を生ぜり。

喜んで紙を食ふ體に臭氣あり。毛は軟かにして綿の如し、毛織物の原料とし、又は筆に造るべし。皮は甚だ薄ければ、往古は紙に代へて用ひしことあり。羊は子を産むこと盛んなるが故に、之を「二歳三生」などいへり。よく群をなして遊び、每群一雄を主とす、之を羊頭といふ。性狼戾なれども、病むときは互に汗すると云ふ。其

の心最とあはれなり。

文學上の趣味 無智の僧を羊僧といひ、山路の樂曲せるを羊腸といふ。軍勢に羊皮を被らしめて、羊群に偽りしことは、古く宋書に見えたり。

昔吳の士顧霈といへる人、客を招きて置酒し、羊を殺して之をもてなさんとせしに、羊は自ら繩を解きて、其の座に居合せたる沙門の膝下に至り、袈裟の裡に、毒を、沙門之を救はずして、却つて其の肉を食せしかば、忽ち皮中に毒痛を發して、遂に羊鳴をなして死せりといふ。

程もなくひま行く駒をみてもなほ 源 有 房 朝 臣

あはれ羊のあゆみをそおもふ

もえつゝく香のけふりの時うつり 右 大 辨 入 道 光 俊

ひつしのあゆみ今日も程なし

○緩漫、又は待兼ぬる意なり。

一九 馬

理學上の趣味 馬は單蹄類にして鬣あり。尾は長く房狀をなす。四肢は長くして強健なり。毛は白・栗・鹿・槽毛・ひばり等ありて、所々に旋毛を有す。古は此の旋毛の部位によりて、吉凶を判じたりといふ。

性溫良にして親しむべく、容貌亦氣品ありて愛すべし。足運び疾くして力あるが故に、以て騎るべく、荷を負はしむべく、車を挽かしむべし。其の他、軍旅・儀式・遊戯等に使用せられて、家畜中最も需用廣きものなり。近來馬の需用多きがため、人為淘汰法によりて、足迅きもの、體肥りて重荷を負ふに適するもの等を得んことに力めつゝあり。

文學上の趣味 馬は南方梅檀香佛の化身なりといひ、又或經には父は吉馬となりて子を乗せ、母は吉魚となりて子に食はるとあり。

雪中放馬尋跡

昔齊桓公、孤竹といへる國を討ちて歸る時、道に迷へり、其の臣管仲、老馬の智用ふべしと言ひ、乃ち老馬を放ちて、其の跡に従ひて歸るを得たりといふ。

家路には石ふむ山もなきものを 家 持 郷

わかまつきみか馬のつまさき

むちかけに驚く駒の心にも 光 俊 郷

猶およはぬは我が身なりけり

冬のよの月の光を雪かとして 太宰大貳高遠郷

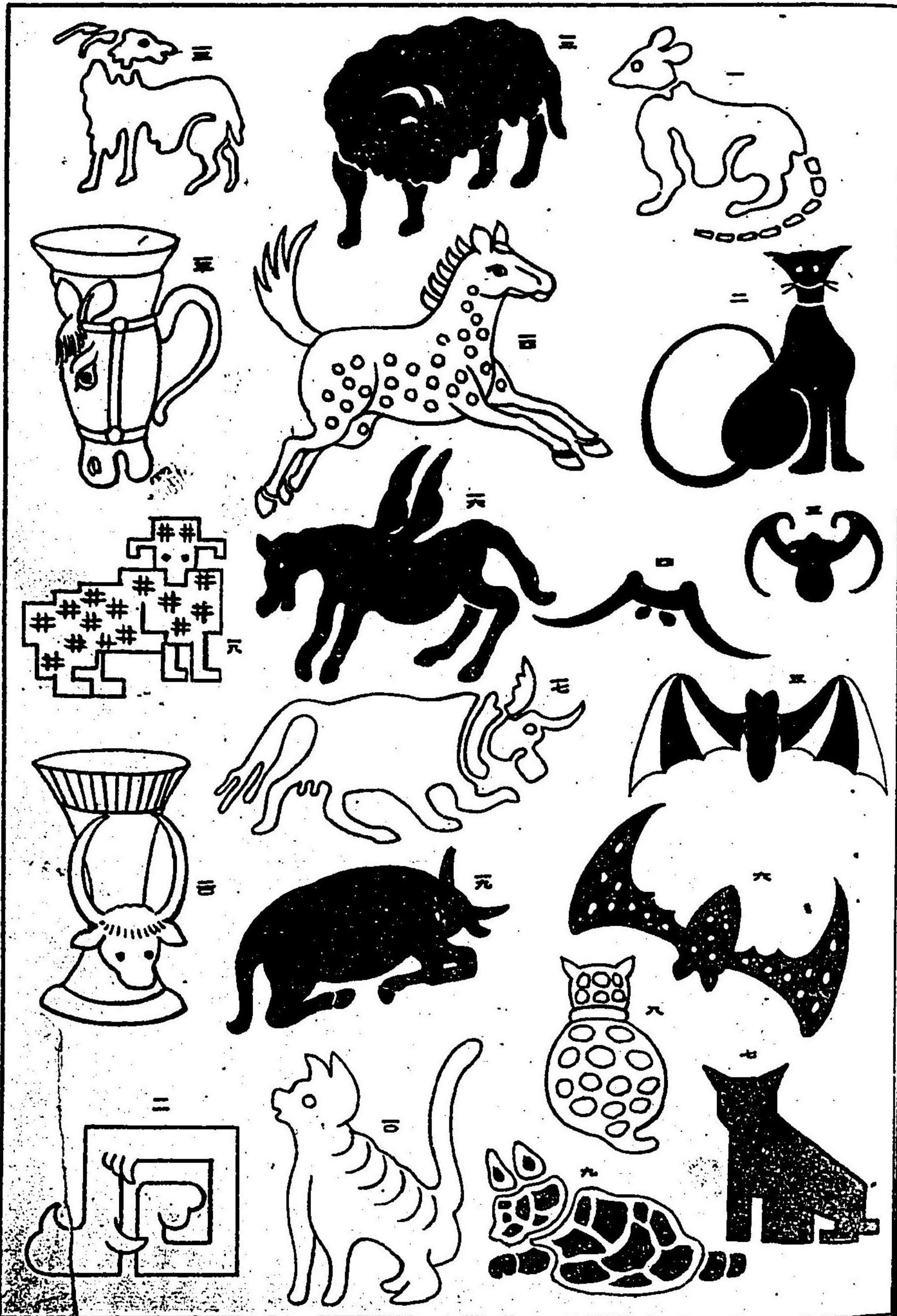
たなれの駒をはなちつるかな

○迅速の意なり。

第四圖

(一)(二)は鼠(三)(四)(五)(六)は蝙蝠(七)(八)(九)(二)は猫にして(二)は猫脚なり(三)(三)は羊
 (四)(五)は馬(五)は教育博物館陳列の外國食器の圖案(七)(八)(九)は牛にして
 其の(三)は外國食器圖案なり。

第四圖



第二章 鳥類之部

一 鶴

理學上の趣味 鶴は其の種類多く、我が國に産するものは、大抵丹頂の鶴なり。嘴、頸及び脚は長くして、水を涉り、魚類を捕食するに便なり。羽毛は白色なれども、兩翼の末端は僅かに黒色を帶ぶ、故に其の窄まりしときは、恰も黒き尾羽の如し、これ世人の誤りて鶴の尾羽を黒しとする所以なり。丹頂の鶴は鳥冠赤し。

此の鳥は、近年著しく減じたれば、今は保護鳥の一として、猥りに捕獲する事を禁ぜり。初冬の候、天氣晴朗なる日には、空に舞ひ、其の聲朗かに雲上に聞ゆ。食欲を節し、清潔を尙ひ、常に大喉より故を吐き、修頸より新を納るゝが故に、其の壽千歳を保つといひ傳ふ、肉と血とは共に藥用に供すべし。

文學上の趣味

我が國の習俗は、吉禮には必ず鶴と龜とを供ふ。丹頂の鶴に仙人の乗れる様を描きしものなどの多きも之が爲なり、宮中にては、毎年の新年宴會に、かしこきあたりより五百對の細工鶴を文武百官に下し賜はると漏れきゝぬ。

巢は必ず千樹萬木の中にて最も安全なる老松を選びて營み、一孕に五六卵より七八卵を孵すと云ふ。子を思ふ事いと切に、親鶴は代るくその巢を衛り、夜を徹して鳴き叫び、害敵の襲來を警しむ。彼の「燒野の雉子、夜の鶴」とは、子の愛情に絆さるゝ親の慈愛心を詠みしものなり。

あしのはに置くしら露やさむからん
讀 人 不 知

さへへのたつのこゑのきこゆる

和歌の浦としへてすめるあし田鶴の
從一位内大臣通茂公
雲井にのほるけふのうれしさ

龜のをの岩根かうへにあるたつの
式子内親王

こゝろしりける水のいろかな

なにはかた汐みちくらしあま衣
古今和歌集

たみの島の島にたつ鳴きわたる

蘆たつのよはひはかたくなりけり
朱雀院

けふや千年の限りなるらん

○長壽の意なり。

二 鳳凰

理學上の趣味 古來支那にては、鳳凰は麒麟龍等と共に、假想的瑞祥のものとせり。爾雅に曰く、雄を鳳と謂ひ、雌を凰と謂ふと。蓋し羽屬の長たるなり。

頭は鶏に似、頸は蛇の如し、背は龜に類し、尾は魚尾に髣髴たり。

全身五彩の色を帯び、高さ五六尺に達すといふ。性梧桐にあらざれば棲まず、竹實にあらざれば食はずといふ。我が邦人の繪畫に、鳳凰の傍に白桐を描けるもの多きは、蓋し謂なきに非ず。此の鳥、虞舜・文王の治世に出でて、泰平を祝ひし瑞鳥なりといふ。

文學上の趣味 風俗文選に曰はく

かの斥鷃が蓬生の宿は、膝をいゝるに過ぎねば、大鵬の雲の萬里をうらやまず、さらばおのれをたのしむのみにして、かならずうらやむ方にもあらず、彼の鳳凰といふ鳥はいかなる鳥にかあらむ。

禁裡には鳳凰の間といふがありて、菊の間、桐の間など、相並び、いと尊き御間の一なりと承はる。

百敷や桐の梢にすむ鳥の

千年は竹の色もかはらし

讀人不知

○高位高官の意なり。

三 孔雀

理學上の趣味 牝は鶏に似て首稍長し、牡は形長大にして頭上に毛冠を戴き、尾は極めて長く、末端に五色金翠の圓文ありて相重なり、之を擴ぐるときは、其の形恰かも扇の如く、頗る美麗なり。牝は尾短くして、且つ冠文及び金翠を缺けり。孔雀の一種なる尾長鶏といへるは、其の尾五尺餘に及ぶ。

孔雀はもと交趾・南蠻の産なるも、今は本邦にも多く飼はる、されども甚だ育て難きがため、更に繁殖せず、此の鳥音樂などの樂みあるときは、尾を披き立て、舞ふ。尾には毒を含むといひ傳ふれども信ずべからず、常に米・蕎麥・粟・菜・青蟲等を好み食ふ。鳴聲は鶴の聲に似たり。

文學上の趣味 齊の文惠太子、孔雀の毛を織りて喪服と爲せし
こと史に見えたり。

四四

春風に尾をひろけたる孔雀かな

子

規

○美觀の意なり。

四 雁

理學上の趣味 形態鴨に似て大きく、首は稍長し。羽毛茶褐色を
帯び、翅は短く、趾間に蹼あり、寒氣を好むが故に、我が國に来るは
秋にして、春に至れば復寒地に去る。池沼又は海濱に遊び、飛ぶと
きは最も老いたるもの先導者となり、他は列を正して之に従ひ、
決してその列を亂すことなし。故に獵者先づ先驅の雁を撃つと
きは、其の他の雁をも獲ること易しといふ。
文學上の趣味 雁かねとは、雁の鳴く音なり、古今集に、

さよ中と夜はふけぬらんかりかねの

きこゆる空に月わたる見ゆ

又新古今集なる定家卿の歌に、

霜まよふ空にしをれし雁かねの

かへるつはさにはるさめそふる

とあり

源義家が雁行の亂るゝを見て伏兵を捜し出しし事蹟は、よく
人の知る處なり。又延喜式には、雁を祥瑞として貴びしこと見え
たり。

奥州外が濱には、毎年秋雁の渡り來て羽を休むる處あり、皆一
尺計りの小枝を啣へ來りて此處に落しおき、來春南方へ飛び去
るとき、再び其の枝を啣みて歸るといふ。されども之を啣み歸る
雁は極めて尠し、こは此の國にて撃ち捕らるゝもの多きが故な

り。土人は之を憐み、其の残れる木枝を集めて風呂を沸かし、諸人に施行して、以て亡き雁の供養を營むとぞ、俗に之を外が濱の雁風呂湯といふ。

待人にあらぬ物からはつ雁の 在原元方

ほとゝきすこゑも絶にし雲路より 家隆卿

行かへりこゝもかしこも旅なれや 読人知らず

くる秋ことにかりくとなく

○規律正しき意なり。

第五圖

- (一)(二)(三)(四)(五)は鶴(三)は最新流行の筆洗(四)は燭臺なり(六)(七)(八)は鳳凰(九)(二)
- (三)は孔雀(五)(六)(七)は雁にして其の(六)は結雁なり



第五圖

五 鴨

理學上の趣味 種類多し、其の羽毛は、頭と頸とは深紫色にして、緑光を帯び、喉下は白色なり、胸は紫色にして黒點あり、腹は淡白紫色にして、小黑斑を有し、背は灰色にして、翅は蒼黒色なり。又その嘴は黄色にして扁く、脚は黄赤色を帯びて蹠を具へたり。

多く海上又は池沼に群れ遊び、能く水中に出没して魚類を捕ふ。古は翅の緑羽をとりて裝飾の用となせしと云ふ。南都東大寺の什物たる鴨毛の屏風は、七言の詩を書きて、此の羽を文字の上に貼せるものなりとぞ。

文學上の趣味 辭に「けり」に、鳧の字を用ふるは、鳧の類に「けり」といふ鳥あるを以てかりたるものなるべし。蓋し鳴聲の「けりく」と聞ゆるが故にもあらんか。鴨は萬葉の歌には、あぢたかへあき

さなど詠めり。

なるみかた沖にむれるるあちむらの 中宮權大進仲實

すかしまを渡るあきさの音なれや 沙彌能食上

さ、めかれてもよをすくすかな

山のはに渡るあきさのゆきてるむ 讀人不知

○歩行の醜に用ふることあり。

六 鶯

理學上の趣味 鶯は又家鴨とも書く。形態鴨に似て大きく、嘴は扁平にして、脚には蹼ありて濶歩す、故に足廣の名を附けたるならん。雄は綠頭・紅掌にして、羽毛文采あれども、雌は黃斑にして、文

采少し。其の他純白のもの、純黒のものなどありて一様ならず。尾は鴨よりも長し。

多く溝・河等の水邊に飼養す。雌十羽に雄二三羽位の割にて飼へば、一年一羽につき百五六十個の卵を産むべし。肉は甚だ美ならずと雖も、往々薬用に供せらる。雄は暗なれども、雌は鳴き、其の聲喧すし。

文學上の趣味 食物和歌本草に、鶯の利用につきていへることあり、次に記して参考に供せん。

鶯こそ虚(空腹)を補ひて、客熱を除き、臟腑を和するものなれ。

鶯こそ驚癩に吉し、丹毒や水道を利し、熱痢とむなれ。

又鶯の卵につきていへることあり。

あひるの玉子多く食せば、身も冷えて心短く、せなかもだゆる。瘡毒ある人あひるの玉子をくひぬれば、身より悪用まひあがる。

なり。

○不恰好の意なり。

七 鴛鴦

理學上の趣味 形態小にして鴨に似たり。毛羽には文采ありて、頭に玄纓を垂れ、頸に紅絲あり、尾には船の舵の如き羽子を有す、之を思ひ羽子と稱す。嘴は扁平にして、脚には蹠を具ふ。

此の鳥、夏は少けれども、冬に至れば多く池澤に飛び下る。又人家に飼ふもあり、肉は甚だ賞すべし。

雌雄相思ひていとほしむこと深きが故に、斯く名づけたるなり。されば人若し其の一を獲んか、他の一は悲しみ煩ひて遂には死に至るべしといふ。今も閨房中に鴛鴦の黄赤五采の者を取りて飾りとなす婦人あり、夫を思ふの意にや。又夫婦の中よからぬ

人に、密にをし鳥を食はしむれば、自ら相思ふに至るべしと。試むべきことなり。

文學上の趣味 古來歌人墨士の賞する所にして、寒池水鳥の畫には、必ず此の鳥を以てし、其の佳趣を添へたり。

磯のうらにつねよひきすむ鴛鴦の 萬葉集

をしきあかみは君かまにく

君か名も我か名もをしのひとつかひ 讀人不知

同しえにこそ住まほしけれ

やまかはに鴛鴦二ついてたくひよく 讀人不知

たくへるいもをたれかいにけん

○夫婦の愛情切なる意に用ふ。

八 鷺

理學上の趣味 鶯には大小種々あり。羽毛は純白にして雪の如く、頸と脚とは頗る長く、喙も亦黒くして長し。頭頂に長毛を有し、身の毛は垂れて簀の如し。能く水を涉り、魚蟲を捕へ食ふ。

群りて水邊に下る時、之を遠くより望めば、恰も花の亂れ落つるに似たり、好んで魚蝦を食ひ、飽けば立ちながら眠る。肉は淡白にして脂少く、夏時水禽の食すべきもの少きときに當り、鶯のみは上饌に充つべし。之を食へば汗を止め、尿を利すといふ。

文學上の趣味 さぎとは「いさぎよき」の轉訛せしならんか。此の義詳ならず。

嬉遊笑覽に「青鶯の目をぬひ、鸚鵡の口を鎖さむ事あたはずといへり。今も水鳥屋にては鶯の目を縫ふことあり。

いりしほのひかたにきゐるみとさきを
いさりに出るあまかとやみん

知

家

霜むすふ入江のまこもすゑわけて

前大納言忠良卿

たつみとさきのこゑもさむけし

○潔白の意なり。

九 千鳥

理學上の趣味 形態鵲鴿に似て大きく、背は灰色にして腹は白し。尾短くして嘴黒く、足は極めて高し、其の歩む様恰も人の歩を移すに似たり。

此の鳥の波の去來に随つて水邊を歩行する狀、蹠跚として興趣あり、俗に之を千鳥歩といふ。冬夜波上を飛んで鳴き、甚だ冬郷の意ありて寂あり。五月頃水上の藻中に巢を作りて、卵を産む。其の雛を捕へ、蟲もて飼ふを得べし、籠中にありても聲を發すること、水邊にて鳴くと異なることなし。常に片足を舉げて休むが故

に、恰も單脚鳥の如し。

文學上の趣味 太田左衛門持資が

遠くなり近くなるみの濱千鳥

鳴音に潮のみちひをそ知る

といへる古歌を思ひ出で潮の引きたるを知り、馬を海中に進めし事蹟は、雄々しくも亦優しきことなり。

おもひかねいもかりゆけは冬の夜の

紀貫之

川かせさむみちとりなくなり

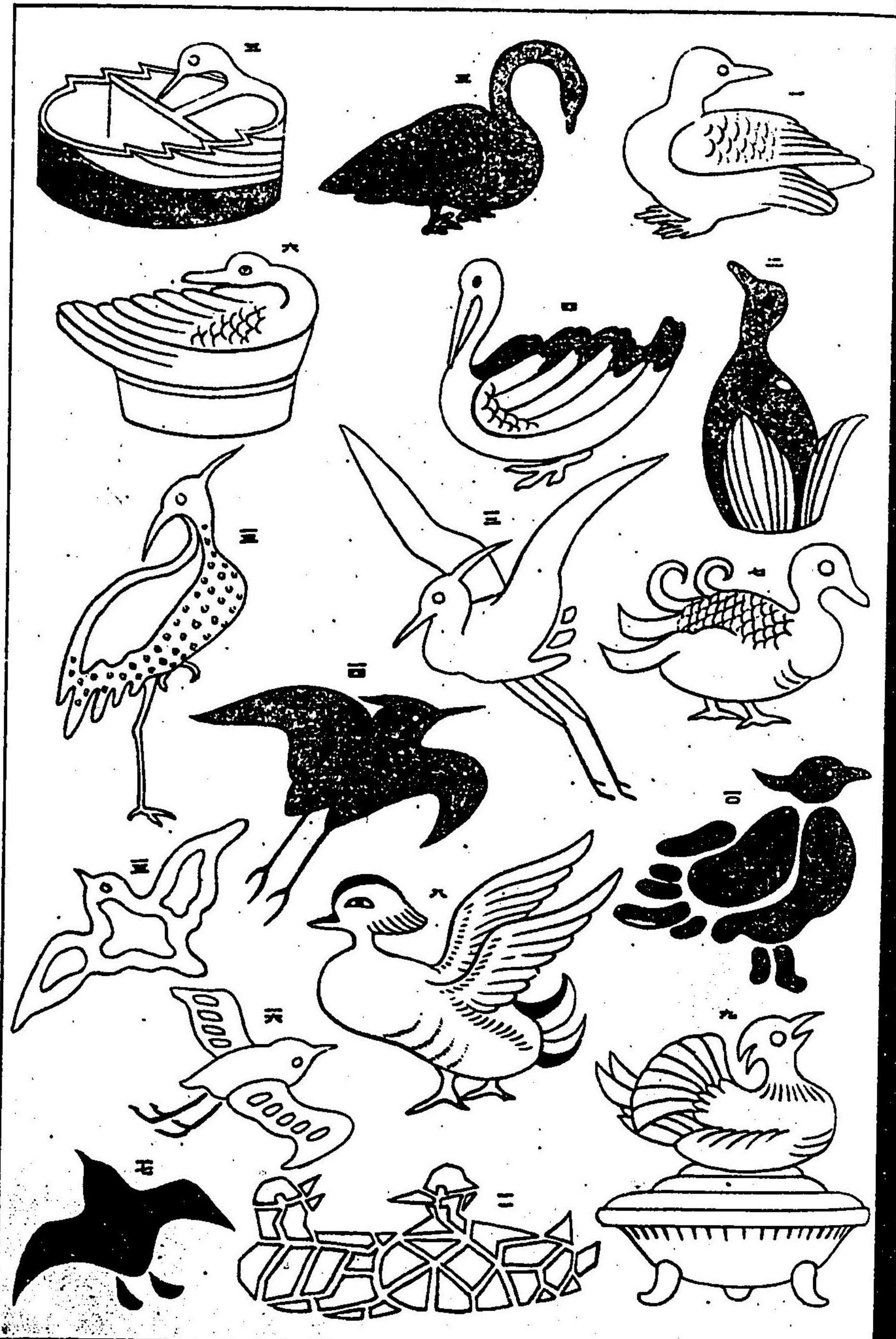
紀友則

ゆふされはさほの河原の河霧に

第六圖

(一)(二)は鴨(二)は表慶館陳列の水滸(三)(四)(五)(六)は鶯にして(四)は最新流行の楊枝入(五)は筆洗(六)は香合なり(七)(八)(九)(二)は鶯(三)にて(九)は表慶館陳列の香合なり(三)(四)は鶯(五)(六)は千鳥なり

第六圖



ともまとはせる千鳥なくなり

○閑靜の意なり。

一〇 鷹

理學上の趣味 鷹は形態鳶に似て、頭稍扁平なり。羽毛は背は蒼白にして、胸は稍白く且つ赤紋あり。尾は能く合して末端圓く、黒白の章紋を付けたり。眼は圓くして大きく、眼光爛々として人を射る。嘴は上味鈎曲して鋭く、爪は鐵剛にして銳利なる鈎状をなせり。絶壁又は斷巖上の喬樹に巢くひ、飛翔すること最も迅速なり、鼠、兔などの小獸を認むるときは、驚くべき速さにて飛び下り、鋭き爪と嘴とを以て攫み去りて裂き食ふ。毛羽は夏の末頃より次第に脱落して新毛を生ず、その脱落する間は、巢に潜みて外に出でず。尾羽子は多く箭羽に用ひ、人の珍重する處なり。

鷹の雛の巢を離れて食を索めんとする時、其の附近の巖窟に小屋を作りて掛網を張り、中に死鳥を吊るし、之を餌として誘ふときは、よく捕へ得べしといふ。

鷹は性猛にして、他鳥を捕獲する事巧みなり。故に往古は鷹を放ちて狩すること盛んに行はれたり、是を鷹狩といふ。雌は雄よりも體軀大きく、且つ食を貪ることも甚だしければ、放鷹の狩には多く雌鷹を用ゐるなり。

文學上の趣味 「良鷹よく爪を匿す」とは、秀でたる伎倆を持ちながら、これを包み藏くして外に現はさざること、たとへたるなり。濫鳥オランダとは、鷹が雀などの小鳥を捕へ、寒夜之を握りて足を温め、翌日之を放ちて、其の日は其の逃げ去りたる方面に於ては鳥を捕へず、以て其の恩に酬ゆといへることなり。

冬の日のくれぬにつもるあふことは 後 法性寺殿

きゝすたつ野のみかりなりけり

けふくれぬあすもかりこむかたのはら 後 京極殿

枯野の下にきゝすなくなり

鷹のとるこふしのうちのぬくめ鳥 後 京極殿

氷る爪根の情をそしる

○反戾又勇猛の意なり。

一一 木兔

理學上の趣味 羽毛は黄黒斑色にして、頭と目とは兔に似たり、兩頬に白き圈ありて、頭頂には毛冠を戴き、翅と尾とは短し、兩耳は尖りて長く、嘴は小にして黒し。

木兔は、又みゝづくとも云ふ、耳角の意なり。

晝はよく視る能はざれど、夜間は蚤虱をも取るを得といふ。

の鳥は遠く飛ぶこと能はず、常に小鳥を捕へ食ふ。其の雌雄相呼ぶ聲は、恰も老人の聲に似て、初めは呼ぶが如く、後は笑ふが如し、故に人以て不祥となせり。若し諸鳥を多く捕へんと欲せば、先づ木兔を林中に吊るし、四圍に羅網を設けおくときは、群鳥集まり來りて木兔を侮り、その暗目を突くが如し、かくて飛び去らんとする時に、その羅網にかゝりて去るを得ず、かくて許多の禽鳥を捕へ得るなり。

文學上の趣味 木兔の自得(田舎莊子の一節)

鷹、木兔に謂へらく、汝を見るに、其の形おかしげにして、丸きつらに小さき嘴あり、頭巾、鈴懸をさせたらんには、小人島の天狗などとも云つべし、大なる眼ありながら、晝はあきめくらにして、日輪をさへ見付得ず、うろくとして諸鳥のために笑はれ、夜は藪の中にかゝみ、居睡とぼけたる小鳥をとりて喰ふのみ、

木兔まはしの手にわたり、撞木につながれ、絲を付けてをりをりひかるゝ時は、ばたくゝとうろつく體、諸鳥のわらひもことはりなり、なまじるに汝も四十八鷹の内なれば、嚙口をしく思ふらん、我、汝がために汗を流すと。

足引の山深くすむみゝつくは

土御門院御製

世のうき事をきかしとや思ふ

山風にならの葉かしは音たかし

光俊朝臣

すむ木兔もきゝやおとろく

○不吉の意に用ふることあり。

一二 鶏

理學上の趣味 形態・性質等は、皆人の知る處なればこゝに述べず。

文學上の趣味 鶏は其の種類多し。されど古來我が國に養はれたるものは、現今の地鳥と呼ぶもの、み。近年外國種も多く輸入せられ、人為淘汰も盛んに行はるゝが爲、其の種類を増すと共に異名も亦甚だ多くなれり。ゆふつけどり・庭つとり・八こゑのとり・くだかけ・かけろなど、數へ來れば限りなし。一種土佐産の「さゝなみ」といへるは、體は地鳥と同じけれども、尾の長さ一丈四五尺に及べり。

ゆふつけ鳥とは、世の中騒がしき時、四境祭とて、鶏に木棉を付けて四方の關にいたり、祭をなすより起れり。又鶏のそらねとは、浦公、函谷關に到りて、臣下に鶏の鳴きまねさせて、關守に夜の明けたる如く思はしめたる故事に因るなり。

長鳴鳥とは、天照太神、天磐屋にかくれさせ給ひし時、思兼神、常世長鳴鳥を集めて鳴かしたるものにして、之より鶏は齋場の

吉鳥として用ひらるゝに至れり。

さしくしのあかつきかたになりぬとや 前齋院肥後

八聲のとりもおとろかすらん

思ひかねこゆる關路に夜をふかみ 前中納言雅頼

八こゑの鳥に音をそそへつる

夕つけの鳥のひところあけぬれば 元 眞

あかぬ別れと我そなりぬる

鶏人曉唱聲 驚明王之眠 和漢朗詠集

鳧鐘夜鳴響 微暗天之聽

○高德の意なり。

一三 鸚鵡

理學上の趣味 上野動物園に飼養せらるるものは、形態鷹に似

て羽毛白く、頭は大きく、嘴巨大にして黒く短し、上味の末端は下に曲り、下味は鋸齒を具へ、趾は四本ありて、其の中二本は前に向ひ、左右の二本は後に向へり。

舌はよく人語をなし、形亦丸きを以て、物を食ふに嘴を多く動かさず、好んで粟稗蕎麥又は鶏卵を食ふ。頭上に冠毛を戴き、喜ぶ時は冠毛披いて満開の菊花の如く、内部より美麗なる黄赤色露はる、俗に之を芙蓉冠といふ。多くの鳥は、眼瞼下より上に閉づるを常とすれども、此の鳥は上下同時に閉ち合ふこと、殆ど人類と異ならず。

文學上の趣味 枕の草紙に、鸚鵡のことを

ことどころの物なれど、あうむいとあはれ也、人のいふらんことをまねぶらんよ、と云へり。

禮記に「鸚鵡能く言ふも飛鳥を離れず」と、これ人にして禮を知らざるは禽獸に異ならざるにたとへたるなり。

「鸚鵡返し」といへるは、此の鳥が人語を反射的に真似するをいへるなり。又鸚鵡岩と云ふは、此處より呼びし人語が、彼の岩に響く山びこの著しきより名づけたるものなり。

あはれともいは、やいはんことのはを 寂蓮法師
かへすあうむのおなし心に

○反響の意に用ふ。

一四 雉

理學上の趣味 形態略、鶏に似たり、雄は頭上に小紅冠を戴き、眼の周圍赤くして、羽毛は五采を帶ぶ。尾は稍長く文采を具ふ。翅は短くして蒼黒く、脛掌共に鶏に似たり。雌は羽毛黄赤にして黒斑

「焼野のきゞす」といへるは、山野焼け擴がりて、雉子の巢に火の近づくときは、其の卵の亡びんことを虞れて嘆き悲しみ、雌先づ俯向けになりて兩の翼の下に卵を挟み、雄は雌の翼を啣へて、安全の場所に避け、以て災を免れ、若し免れがたきときは、雌雄卵ともに焼け死すといふに起れるなり。また雌の卵を温むるや、雄は必ず其の附近にありて之を衛り、狐狸の襲來に意を配るなり、其の我が子を思ふの切なる、彼の夜の鶴と比すべきなり。

春の野のしけき草はの妻戀に

平貞文

とひたつ雉のほろゝとそなく

むさし野の雉子や、いかに子を思ふ

後鳥羽院御製

けふりのやみに聲まとふなり

○愛子を戀ふるの意なり

第七圖

- (一)(二)(三)(四)は鷹(三)(四)は外國圖案(五)(六)は木兔(六)は流行の置時計(七)(八)(九)(二)
- (三)は雞にして(九)は外國の滑稽圖案(四)(五)は鸚鵡(六)(七)(八)は雉子なり。

一五 鳩

理學上の趣味 白きもの灰色のものなどありて、脚は赤く、胸は凸出せり、故に人の胸の凸隆せるを鳩胸といふ。

鳩には山鳩・家鳩等種々あり。家鳩は我が國到る處の神社・佛閣等に多く飼はれ、人に馴れ易く、よく鶏・犬などと共に遊ぶ。屋上に棲を構へ、局々窓を開きて出入し、匹偶常に一局を守り、他の匹偶の入るを拒む。蓋し鳥類と雖も、節操を守ること斯くの如きに至りては、歎稱するに餘りあり。されども山鳩は巢を營むこと甚だ拙劣粗麗にして、往々巢より卵を墜落することありと云ふ。

文學上の趣味 「鳩に三枝の禮あり」といへるは、子鳩は、親鳩の棲へる枝より必ず三段下の枝に棲むものなるによる、心すべきことなり。

老人の杖に鳩の形を付くるは、鳩は其の性食に咽び、老人も亦痰迫りて氣弱く咽ぶものなれば、厭禳として付けたるなりとぞ。又「鳩の戒」といへるは、鳩は鶯の巢を造るを學びて己が巢を造れども、其の造り方粗麗にして完からず、往々巢の隙間より卵を墜すことあり、故に粗雜の行ある人を誡しむるに此の語を用ひたるなり。

しけりつゝこふかき山の夕くれは

信實朝臣

こもり聲にそはともなきける

をりにあへは鳩ふく秋の山ひとも

隆信朝臣

よろつよとこそ聲をたつなれ

○拙劣の意なり

一六 雀

理學上の趣味 形態は人のよく知る處なれば、略す。

竹藪人家の檐下等に群居し、性闘を好む、目は夜間物を見る能はざるが故に、宿に迷ひて人家に入り來ることあり、春二三月及び秋八九月頃卵を産む。常に米穀を食ふが故に、秋の稻田を害すること大なれば、之を防がん爲に、案山子、鳴子などを設けて之を逐ふ、亦秋の田の一奇觀といふべし。

文學上の趣味 雀の歩行は、躍りてすゝみ行くを以て、すゝみと云ひしを、後にすゝめと呼ぶに至りしなり。

舌切雀の嘶は、訓話の良き材料として用ひらる。今も山城國伏見の里に、古への舌切雀の棲屋なりと言ひ傳へられたる家あり

て、幾十羽の雀、家の軒下・天井などに、瓢箱、或は笹に、とりぐに巢を營みて、鳴きつ飛びつ、其の喧躁名狀すべからざるものあり、されど此の家の人は少しも之を忌む氣色なく、雀どもを我が子の如くいたはり護るといふ、いとめでたきことなり。雀躍斜ならずとは、雀の小躍りして進む様を謂ひしものにて、欣喜身の措く處を知らざる時に用ふるなり。すべて形の小なるものには、其の名の頭に雀の字を附けたるものあり、例へば雀魚、雀貝、すゝめ萩などの如し。

なる子引く田面の風になひきつゝ 定 家 卿

浪よるくれのむら雀かな

吳竹のねくらあらそふ村すゝめ 二條院讚岐

そののみともにきくそさひしき

すそ野には今こそすらしこたか狩り 後 京極攝政

山のしけみにすゝめかたよる

○小形の意又喧躁の意に用ふ

一七 鶯

理學上の趣味 大き雀の如く、背は鰲黒にして黄を帯び、喉より腹に亘りては灰白色なり、嘴脚共に細く、脚は蒼黒色なるもの、灰白色なるもの、或は僅に黄を帯べるもの等あり。

此の鳥、冬は叢林中に雌雄二三十羽も群棲し、春に至れば離散して各適する林中に移り、清亮なる聲を發して囀る、されど雌は鳴かず、又二羽三羽打ち揃ひて諸音に鳴くことなし。巢は五月の頃竹葉を啣み來りて構へ、内には棕櫚の毛を敷きて床となす。文學上の趣味 うぐひすは、神代には法吉鳥フタキトリといひたり、一名花見鳥又はこほひ鳥ともいふ。法吉鳥とは其の鳴き聲の「ほうきど

りと聞ゆるが故にして、佛教の傳來ありてよりは「ほうほけ經」と轉訛するに至れり。

鶯の谷より出つるこゑなくは 大江千里

春くることを誰かしらまし

鶯の鳴きつる聲に誘はれて 讀人知らず

花のもとにそ我は來にけり

あら玉の年たちかへるあしたより 索性法師

待たるゝものは鶯のこゑ

あさみとり春立つそらに鶯の 紀貫之

初音をまたぬ人はあらしな

花ならて身にしむものは鶯の 道因法師

かほらぬ聲のにはひなりけり

○初春或は清亮の意を含む

一八 杜鵑

理學上の趣味 形態鷹に似て小なり、色黒くして茶を帯び、腰のあたりに斑紋を有し、口中は赤き故に血に啼くの説あり。頭小さく體瘦せて長し、前趾は後趾よりも稍長く、前後趾とも各二つにして黄色なり。

四五月頃晝夜を問はずあはれなる聲を發して鳴き、初秋に至りて止む。此の鳥は巢を造ることを知らず、故に鶯等の古巢を索めて産卵す。凡ての鳥は、雄はその羽毛麗はしくして雌は劣れども、ほととぎすのみは雌は雄よりも美し、

釀酒家にては、此の鳥の羽毛を甚だたふとべり、こは雌雄にかかはらず、その羽毛を酒槽におし入れ、又は其の傍に置くときは、酒の味變ることなきが故にて、若し味の變りしときは、其の羽毛

を黒焼として酒に投ずれば、忽ち元の味に還るものなりといふ。試むべきことなり。

文學上の趣味 「ほととぎすの血に啼く」といへるは、元來口中の赤きに因るものならんも、二月頃啼き初むるに當りて、凝血を吐くこと三度に及びて、次第に本來の聲を發するに至る故なりともいひ傳ふ。されば「杜鵑春至則鳴先鳴者死」といへるも理なり。枕の草紙に

五月雨の短夜に、ねざめをして、いかで人より先に聞かんと、またれて夜深く打出たるこゑの、うつくしうあいぎやうつきたるいみじう、心あくがれせん方なし、みなづきになりぬれば、音もせずなりぬ、

昔、蜀の國のみかど御名を杜宇と申し奉る、蜀のみやこを出て、旅にて身まかり給ひ、その御魂ほととぎすと化し給ふ、鳥となり

ても國やこひしくましくけん、不如歸となきて、旅人までも我が方へかへらんにはしかじとすゝめ給ふとあり。
 又此の鳥は、死出の山よりきたる故に、其の聲悲哀なりと、田家は之を候うて、農事を興すといふ。

いつのまに五月きぬらんあし引の

讀人不知

山時鳥今そなくなる

時鳥鳴く聲きけは別れにし

讀人不知

古里さへそ戀しかりける

郭公ねくらなからの聲きけは

伊勢

草の枕そ露けかりける

月よりもまちそかねつる郭公

前大納言公任

み山を出てん程をしらねは

月残るね覺の空のほとゝきす

前大納言爲兼

圖八第



更におき出て名残をそきく

聞子規

唐雍

陶

百鳥有啼時

子規聲不歇

春寒四隣靜

獨叫三更月

湘江夜泛

唐熊

孺

登

江流如箭月如弓

行盡三湘數夜中

無那子規知向蜀

一聲々似怨春風

○悲哀離別の意なり

理學上の趣味 形態雀に似て稍長く、背は玄黒にして、腹部は白し、頷は紫色を呈し、尾は岐れたり、身體極めて輕捷にして、反轉上下意の如くならざるはなく、飛翔迅速なり。

一九 燕

雁の寒氣を好むに反し、此の鳥は溫暖の地を好む故に、我が國へは二三月の頃來りて秋去る、其の來るや必ず元の家に就き、決して他家に巢くはず、巢は泥土を啣みて屋宇の下に營み、往々雀の爲に巢を害せらるゝことあり。

文學上の趣味 つばめは、つばくらめともいひ、土をはみて巢を作るより、其の意轉訛してつばめと呼ぶに至れるなり。

雌雄相雙びてすむ、故に夫婦間の祝言に用ゐることあり。

燕くる時になりぬとかりかねは 家 持 卿

ふるさと思ひつゝくもかくれなく

春をこふるこゝろにいかゝつはくらめ 後 京 極 攝 政

第八圖

- (一)(二)(三)(四)(五)は鳩(三)は蝙蝠傘柄(四)は香合(六)(七)(八)(九)(一〇)は雀(二)(三)(三)は燕(四)(五)
- (六)(七)は杜鵑なり。

かへる野なかの秋の夕暮

○舊恩を忘れざるの意なり

二〇 都鳥

理學上の趣味 都鳥は鴨に似て嘴長く、背は灰色を帯び、腹と翼下とは白色なり、故に飛ぶときは白く見ゆれども、捕へて之を見れば、紅色のうつりありて、極めて美麗なり。

春の頃、若鮎を追うて潮のさしひきする河流に上り、水邊の沙上に群をなす、東京の隅田川に多く群がるを以て、みやこ鳥と呼ぶなりといふ。又一名おほせこどりといへるは、呼ぶ鳥の意なるべし。

文學上の趣味

ことゝははありのまにくみやこ鳥 和 泉 式 部

都のことを我にきかせよ

にこりなき御代にあひみるすみた川 前三河守ト部兼直上

すみける鳥の名をたつねつゝ

思ふ人なき身なれとも隅田川 讀 人 不 知

名もむつまじき都鳥かな

都鳥うこくはかりのうつし繪に 讀 人 不 知

こめけむ筆の心をそしる

○人を戀ふるの意なり

二一 雲雀

理學上の趣味 形態雀に似てや、大きく、羽毛は淡黄色にして
黒赤の斑あり、翼は輕捷にしてよく雲際に飛翔し、脛は細長く、且
健なるが故に、歩行も亦速なり、其の聲喧しくして高く響き、春の

日和に一層の長閑さを添ふ。

性疑深く、四五月の頃卵をかへすや、天空より直ちに巢に下り
ずして、先づ數十歩の外に下り、疾く歩みて己が巢に至る、されど
も飛び立つときは直ちに巢の上より舞ひ上るを以て、其の巢を
索めんには、雲雀の飛び上る處に注意せば、容易に捜し出すを得
べしといふ。

文學上の趣味 雲雀は告天子とも書く、晴れたる日、空に高く登
りて鳴く故に、ひはるといひしなり。

我きみのみことかしこみ門を明けて 讀 人 不 知

雲雀の使今や待つらん

子を思ふすたちののをを朝夕に 寂 蓮 法 師

あかりもやらすひはりなくなり

わかなつむあら田のおもの夕霞 家 隆 卿

わくる袂にひはりおつなり

○天使の意に用ふ

二二二 鳥

理學上の趣味 形態は人のよく知る處なり。

毎旦日出前より樹林に鳴き、群をなして人家近くに飛び來り、汚穢物を貪り喰ふ、黄昏に至れば、又啼いて叢篁に宿る。凡て禽鳥は雌雄の別明かなるものなれども、獨り鳥のみは見別け難し、故に「誰か鳥の雌雄を知らん」とは、黑白辨じ難き意に用ひるなり。文學上の趣味 鳥は慈鳥とも書く「反哺の孝」あるが故ならんか、俗に「七月のわかれがらす」と云へるは、初春の頃、親鳥六十日の間子鳥を哺育したれば、子鳥長じて亦六十日の間親鳥を養ひて、七月に啼き別るによるといふ、眞に慈孝の鳥と謂ふべし。

鳥の啼聲悲しければ必ず凶事ありと、余も亦然く感ぜしことあり。奇といふべし。群談採餘の詩に、

鵲噪未爲吉 鴉鳴豈是凶

人間凶與吉 不在鳥音中

とあり。

「鳥の鵜の眞似」とは、身の程を知らずして我が身を亡すに至るを云ふなり、鵜は水に馴れたるを以て、よく魚を捕ふれども、鳥は水になれざるに、其の羽毛の黒き點は鵜に似たるを以て、己亦鵜の如くなし得べしとし、遂に魚を捕へんとして、却つて溺死したるより、此の諺出でたるなり。

歌に曰く

とりもえぬ魚の心を耻もせて

鵜のまねしたる鳥川かな



おほろかほろくにきぬる山鳥

權僧正公朝

鶉のまねすともうをはとらしな

鳥はむくつけき鳥なれど、孝をつくす心ばへ、哀れなり。元日のあけぼの、東の方しらみ行くほど、黒き林の中より聲のみ聞えて飛び行くもをかし、星見えぬばかり月さえたる夜、晝の心地して梢に打ちさはりて鳴きたる、又をかし、夏の夕つかた、日も入りはて、涼しき頃、ねぐらとひおくれたるが、二つ三つ飛び行くもをかし、雪ふり積りて、庭も野山もこといろなきに、獨り飛びかふもはえありてをかし。(關の秋風の一節)

第九圖

(一)(二)(三)(四)(五)(六)は燕(七)(八)(九)は都鳥(一〇)(一一)(一二)は雲雀(一三)(一四)(一五)は鳥なり

うちはふきねにゆく空のむらからす

定家卿

おのかあはれは夏の夕くれ

村からすこすゑのとこをあらそひて

隆房卿

稻荷の杉にゆふかけてなく

○慈孝心の意なり

第三章 蟲類の部

一 蝶

理學上の趣味 蝶は其の種類多し。體は頭胸腹の三部に分れ、四枚の翅と六本の脚とを具へ、二條の曲れる口吻を有し、之を展ばして花蜜を吸ふ。翅には大抵美麗なる紋章あり。止まるときは四枚の翅を體の上方に立つ。夏の末に至りて蛆となりて地中などに蟄む。

蝶は一名を胡蝶と呼ぶ。春菜花の咲き初むる頃出で、百花に舞ひ戯る。其の姿態艶麗にしてゆかし。美姫の蝶の装ひして、輕快に舞ふを「胡蝶の舞」といひ、劇場などにて屢見る處なり。

文學上の趣味 説文には、蝶の本字は蜨を用ひたり。又雅名には春駒或は野織といひ、或は探花使、探花子など、も云へり。これ所

謂胡蝶の花に戯る、を、古くより詩歌に詠ぜしを以てかく名づけたるならん。

とこなつのあたりは風ものとかにて 寂 蓮 法師

散りかふものはてふのいろく

はかなくもまねく尾花にたはむれて 源 仲 正

暮れ行く秋をしらぬてふかな

○美女の意なり

二 蜻蛉

理學上の趣味 頭太くして胸短く、腹部は節状をなして頗る長し。四枚の細長き翅及び六本の脚を具へたり。

蜻蛉は赤・青・黒等其の種類多し。春夏の交、水より出て蒲或は川の柳の枝上によち上り、脊部鱗裂して羽化し、遂に蜻蛉となるなり。

人家に近く幾百匹となく群をなして飛び交ふ。

文學上の趣味 蜻蛉を一名勝蟲とも云ふ故に其の勝の字を取りて目出度き蟲なりとし昔より多く武具の模様等に用ひたり。

今や我が國は戰捷の榮を雙肩に擔ふの時なれば此の蟲の形をとりて種々の圖案に應用せんは誠に趣味あることなるべし。

又か。げ。ろ。ふ。といへるは春の日影によりて見ゆるかげろひにたとへたるものなるべし漢名にて陽炎・絲遊・野馬等云へると同義にして此の蟲數多中天に飛び交ふとき翅ひらめきて恰も陽炎に似たるより起りしなるべし。

古はあきつとも云へり我が國の地形は蜻蛉のとなめに似たるを以て秋津島又は秋津洲の異名を生ぜしなりといふ。

夕暮の軒のかけろふ見るまゝに 衣笠内大臣

あはれきためもなき世なりけり

あはれなり山おろしふく夕暮に 光俊朝臣

なきかすまさる軒のかけろふ

夏の日もあたりに知らぬたもとかな 寂蓮法師

かけろふわたる竹のした風

○勝利の意なり

三 蜂

理學上の趣味 蜂は尾端に劔を有するが故に有劔類の名あり。體は頭・胸・腹の三部より成り胸と腹との間は頗る細小なり四翅と六脚とを具ふ。

蜂は其の種類多く春夏の候百花咲き匂ふ頃出て飛び花蜜を吸ふ一種蜜蜂といへるは一巢に一匹の女王を戴き其の配下に若干の雄蜂と數千の働蜂とありて一團體を結び頗る勤勉なり。

盛夏の候と雖も、寸時も休むことなく、蜜を吸ひ來りて巢に貯ふ、其の職務に忠實にして智慮あること、誠に感ずべし。且つ一致協力、の精神に富めることは、人類の國家を組織せるに彷彿たり、蓋し義の堅き蟲と言ふべし。その劔は敵を防ぐの用に供するものにして、妄りに人畜を螫さざれども、若し其の怒に觸るゝときは、忽ち一撃を蒙りて、其の痛み堪へ難く、小兒の如きは、往々死に至ることありと云ふ。

文學上の趣味 はちははりさしの轉訛せしものにして、別名を「すがる」とも云ふ、又腰の細きを以て「腰細のすがる乙女」など、古歌に詠まれたり。

蜂の劔は、軍人の武器に類するを以て、戦時の圖案として、現時廣く我が國に用ひられたり
すがるなく秋の萩原朝立ちて

旅行く人をいつとかまたん

(此の歌に於ける「すがる」は鹿の意を表はすに似たれど、それは誤れり)

しなかととりあはにつきたる梓弓

末のたまなはむなわけの廣きわきも

腰ほそのすがる乙女のそのかほのうつくけさに

○勤勉又は義勇の意なり

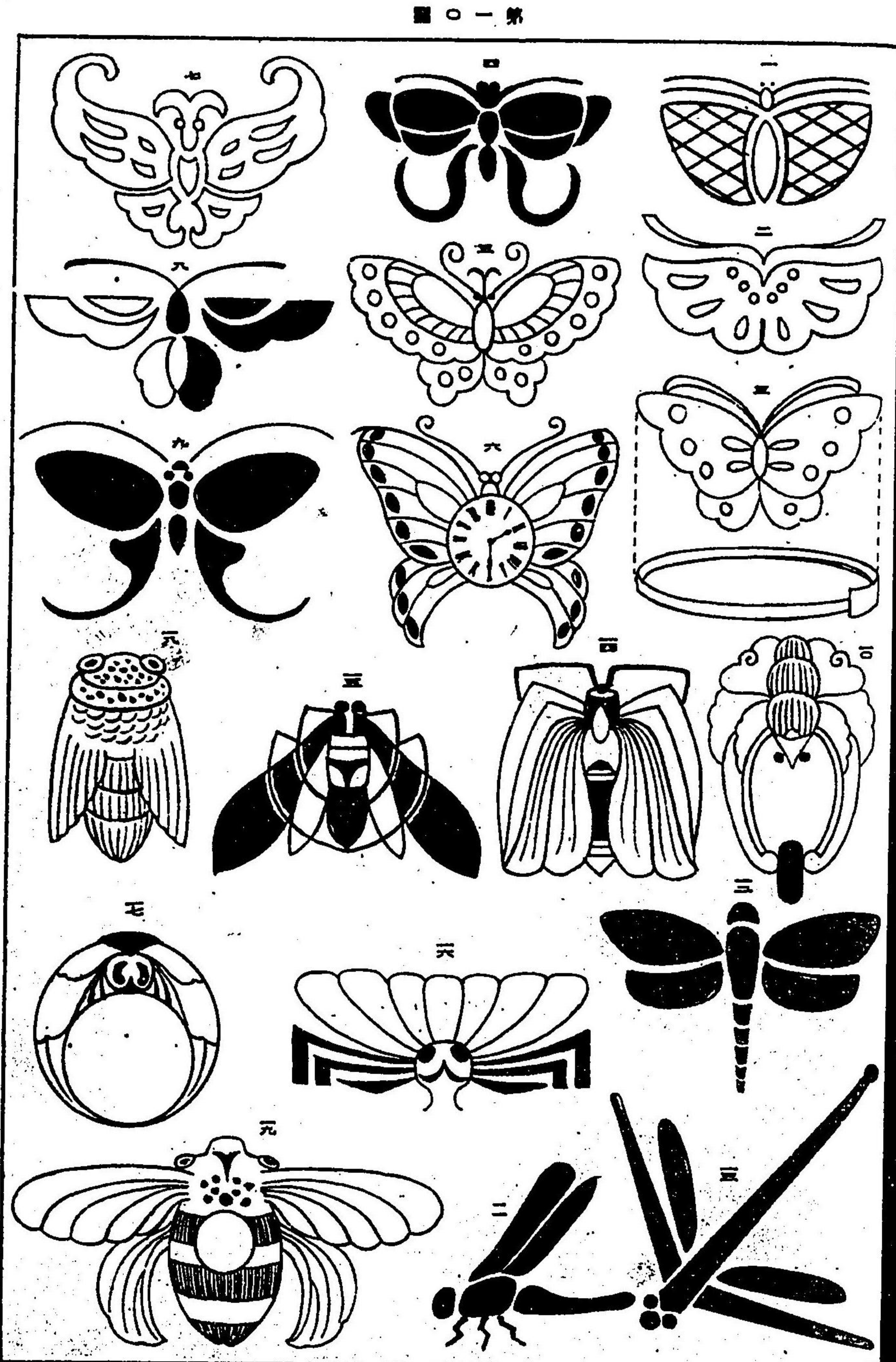
四 蟬

理學上の趣味 頭は稍、方形をなし、眼は露出し、口は嚙じてさながら全く無きに似たり、腹部は頗る膨大にして、下腹に裂番を備へ、羽を振ふて鳴く、翅は蜻蛉に似て薄く紗の如し。
五月の初め頃より出で、樹梢に鳴く、其の聲頗る喧しく、恰も

衆僧の梵唄唱ふに似たり。
 蟻蟻の土中にて蛹となれるを腹蟻といふ、之を指にて摘めば、
 腰より上を左右に揺かすが故に、俗に「西はどつち」とも云ふ、是より
 轉じてに「しやどち」と呼ぶなり。夏月土中にて腹蟻より蛻化し
 て蟬の形となり、土中を出で、樹木の根上一二尺許りに上る、此の
 時は既に頭足備はれり。それより數日の後、皮を蛻して再び三五
 尺を登り、其の後、日を経て再び皮を蛻し、初めて完全なる蟬とな
 るなり、其の蛻け殻を空蟬といふ。

第一〇圖

(一)より(六)までは蝶にして(三)はおさげ止め(六)は置時計(四)は摘み手の圖案
 なり(二)(三)(三)は蜻蛉にして(三)は鏞の戦時圖案なり(四)(五)(六)(七)は蜂(七)は指環
 (六)は蟬の圖案なり



第一〇圖

文學上の趣味 うつせみと云ふは、現しき身又は現しき世などの意にして、娑婆に於ける人の命のはかなきを云へるものなり。古歌にも「空蟬の命」空蟬の世などとよまれたり。

うつせみのはにをく露のこかくれて 讀 人 不 知

しのひくゝにぬるゝ袖かな

いつれをかのとけきかたにたのまゝし 讀 人 不 知

蓮の露と空蟬の世を

女郎花なまめきたてるすかたをや 俊 頼 朝 臣

うつくしよしと蟬の鳴くらん

○喧噪又は無常の意に用ふ

第四章 魚類の部

一 鯉

理學上の趣味 赤きものを緋鯉といひ、灰白色のものを真鯉と云ふ、大なるは長さ三四尺に達するものあり。口の兩端に二條の鬚を具へ、眼は大にして圓く、鱗片は側線に沿うて三十六枚あり、故に六六魚ともいふ。

鯉は河沼等の淡水に産し、我が國にては淀川及び江州の河湖に産するものを佳良とす。此の魚水中に在るときは、潑刺として力頗る強けれども、一度俎上に置かれて刀を以て撫でらるに及んでは、行儀端正、決して動くことなしといふ。この魚は容易に鉤に懸らず、又網を脱することも巧にして、熟練なる漁夫も往々失敗を招くことあり。

文學上の趣味 「鯉の瀧上り」と云へるは、此の魚の水を泳ぐ勢頗る旺にして、滔々と落下する瀧をもよく泳ぎ上るを得るが故なり。されば男兒を祝ふ五月のぼりに、鯉の吹流しを飾るは、此の兒の向上發達せんこと、鯉の如くあれかしと願ふ意なり。

鯉の生づくりと云へるは、生ける鯉を俎の上にあげ、肉を損ぜざる様庖刀して、肉片を元の如く疊み合せ、之を大なる皿に盛りて客座に運び、少許の酢を其の眼に滴下すれば、鯉は潑刺として動き、さながら生けるが如し、其の生肉をとりて、客に進むるものにて、眞に珍らしき料理法なり。又鯉は筥に入れて流水中におけるば、腹中の泥を吐き出すが故に、土臭を去りて、味一層宜しといふ。

淀川にいけないつなけるこひをみよ 家 良
 誰も此の世はあはれいつまで

水ふねに浮ひてひれふるいけ鯉の 光 俊 卿

いのちまつまもせはしなのよや

○向上の意なり

二 鯛

理學上の趣味 鯛は魚類中の長にして、形色共に愛すべく、味亦佳なり、故に「腐りても鯛」と稱せられ、他魚の遠く及ばざる處たり。此の魚古より宗廟の祭祀に供へ、又至尊の御膳に薦められ、民間に於ても、冠婚大饗の餽贈には必ず之を用ふ。蓋し鯛は神靈に通じ、永壽疆りなきが故なり。又鯛をめでたいと通はせて、吉祥のしるしともなせり。

文學上の趣味 鯛はたひらかの意にして、此の魚の平かなるより名づけしなり。

我が國到る處の海に産す、駿河の興津鯛と云へるは、其の昔家

康公の奥女中におきつと呼ぶものありて、或時宿下りせしとき、其の歸るさ、生干の甘鯛を以て公に獻じたりしに、殊の外御口に合ひたれば、戲に「おきつ鯛」と御錠ありしより、今も此の名を殘せるなりと云ふ。

逢事をあこきの島にひくたひの 古今和歌集

たひかさならば人もしりぬへき

春ことに櫻たひとそきしかと 赤染衛門集

梅をかさせるかそつきにける

○吉祥又永壽の意なり

三 金魚

理學上の趣味 體短く、腹膨れ、尾は長くして廣く、多くは三つに岐かる、その赤きものを金魚と云ひ、白きものを銀魚と云ふ、形色

共に愛すべきを以て、桶槽盆池或は玻璃器中に養ひて賞玩せらる。其の泳ぐときは、頭を下げ、尾を上を擴げて踊るが如く、頗る美觀なり。常に好んで子子を食ひ、又麩餅をも嗜む。春の末藻中に卵を生み、初は黒くして後赤くなり、老いて白くなるといふ、肉は食ふべからず。

文學上の趣味 金魚は古くより江戸にても養はれたるものなるべし、下谷池の端のしんちう屋といへるは、延寶の頃より名高き金魚商なりといふ。

影涼し金魚の光りしんちう屋

調

梶

金史の輿服志に「親王、佩玉魚、一品至四品、佩金魚、以下佩銀魚」とあり、之に據りて見るに黄金を以て魚形を作り、有位者に佩ばしめしものなるべし。

をとれるや狂言金魚秋の水

松

滴

○高位高官の意なり。

四 鮭

理學上の趣味 形態鮎に似て大きく、長さ三四尺に達するものあり、鱗は細かくして、斑紋を具へ、皮は厚し、肉は赤くして且つ細刺なく味美なり。胎中の卵は大なるは豆の如く、顆顆攢簇して玉蜀黍の形をなせり、味亦美なり。

我が國東北の河川に多く産す、殊に松前蝦夷最も多し、七八月の頃海より隊をなして川に溯る、此の時を漁期とす。卵は鹹淡相交る處に産す。

文學上の趣味 さけは裂の意なり、其の肉片々にさけやすきが故なるべし。

鮭を祝儀に用ふることは都鄙ともに行はる。此の魚、母子相慕

ふの情深く、繁殖亦旺なれば、子孫繁榮の意にとりて、かく祝儀に用ふるなりと云ふ。

○繁殖の意なり。

五 鮎

理學上の趣味 形態竹葉に似て細長く、頭は尖り、背は淡青くして、腹部は白し、鱗は極めて小にして、鰭の先端少しく赤色を帯ぶ。肉は潔白にして臭味なく、味美なり。春の初め海水と河水と相交る所に生れて河水を溯り、晩秋に至れば再び河を下り、潮ざかひに卵を生みて死す。巖又は大石多き大河に住むものは、苔を食ふが故に、甚だ肥大なり。性頗る蠅を嗜むを以て、大井川沿岸の人は、よく馬尾もて蠅頭の形を作り、之を垂れて釣ること盛んに行はる。此の魚春生れて其の年内に死するを以て一名年魚ともいふ。

文學上の趣味 香魚と書くは、味美にして香氣あるが故なり。其の鮎の字を用ふるに至れるは、昔神功皇后此の魚を釣りて三韓征伐の吉凶を占ひしによると云ふ。

あたなりと餘所にはみえて山河の 權僧正公朝

かけへの鮎もかもつくるなり

さひ鮎の瀬々に身をとく砥石哉 光 香

落行は爰やうきよのさゝの鮎 重 頼

○潔白の意を表はす。

六 鮎

理學上の趣味 鯉と同じく淡水に住む、鯉よりも小なれども、時としては長さ一二尺に達するものを見ることあり、色黒く、體は扁平且つ肥大にして、脊隆く、頭は小なり。

好んで泥土を食ふて雑物を食せず、池澤中に産するものは、骨軟かにして肉味美なれども、流水中に生ずるものは、骨稍硬くして肉も亦美ならず。我が國にては、江州琵琶湖に産するもの味最も賞すべく、俗に之を源五郎鮎といひ、一名夏頃鮎ともかく、その鮎鮎は旅客の珍重する所なり。又東京千住鮎も、風味の佳なること琵琶湖の鮎に譲らず。

文學上の趣味

いにしへはいともかしこし堅田鮎

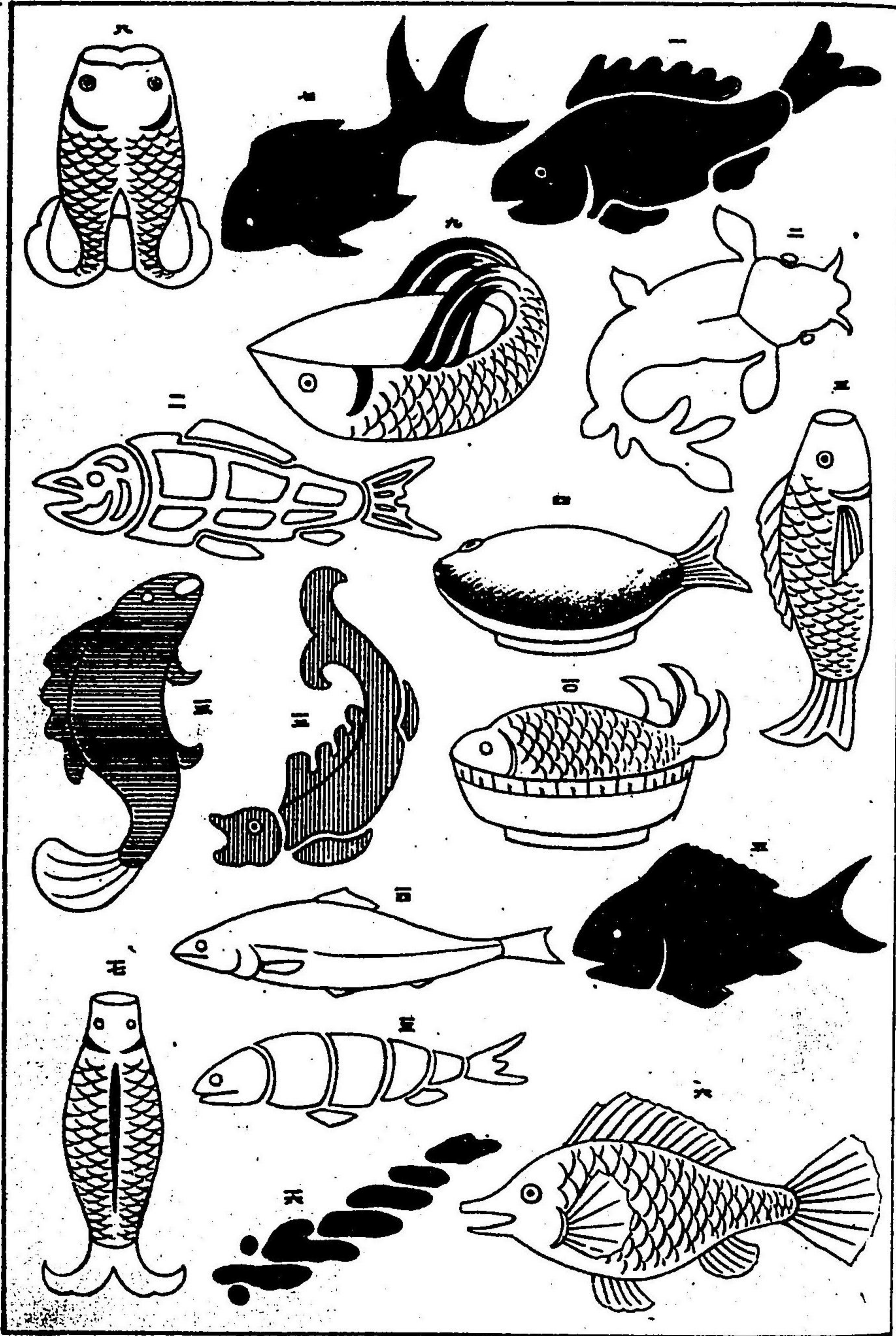
衣笠内大臣

つゝみやきなるなかの玉つさ

第一一圖

- (一)(二)(三)は鯉にして(三)は懸け花挿みなり(四)(五)(六)は鯛にして(四)は皿(七)(八)(九)は金魚にして(八)は箸挿み(九)は湯さましなり(二)(三)(四)は鮎(五)(六)(七)は鮎にして(七)は花瓶なり。

第一一圖



鮎によせてよめる

讀人不知

さまかへて世をこゝろみん飛鳥川

戀路にえつるふな人そこれ

かへし

飛鳥川淵こそせにはなるときけ

讀人不知

戀さへふなになりにけるかな

○妾婢の意に用ふ。

第五章 爬蟲類の部

一 龍

理學上の趣味 龍も亦麒麟鳳凰等と相並びて四靈の一なり。素より假想的のものなれども、古來龍の畫を見るに、諸動物中の最も恐ろしき部分のみを採りて描きなせるが如し、即ち面は獅子の顔を一層恐ろしく作り、眼には牛眼を附し、頭上には鹿の角を生やし、體には大蛇の鱗片を大きく着せ、四肢は鶩の脚に似て鋭く曲れる爪を具へ、且つ焰を吐き、星の玉を呑まんずる態をなし、よく雲霧を起して其の裡に現はる。蓋し頗る神靈を有し、鱗蟲三百六十六中龍を以て長となすと云ふ。古來龍の風を起し、雲を呼び、雨を降らしたる奇談少からず。

文學上の趣味 「たつのおとしご」とて、海藻の間に棲む蟲は、其の

狀稍龍に似たるものなり、又「龍まき」とは、彼の旋風が海上又は湖沼中に起れるをいふものにして、その起らんとするや、晴天俄にかき曇り、暗黒の水柱物凄く水面より巻き騰りて、高く雲を衝きたる様、さながら龍の上天するに似たり、其の中に龍の頭、胴などを認めたりなど云ひ傳ふれども、信じ難し。

くちをしや雲井かくれに住むたつも 俊 頼 朝 臣

思ふ人にはみゆなるものを

契あれば鶉の羽ふきけるはやまにも 源 仲 正

龍の宮ひめかよひしものを

○貴顯の御位にたとふることあり。

二 龜

理學上の趣味 龜は種類多く、頭は蛇に似て、尾は蝶螈の如く、背

には堅き甲を具へ、表面に十三枚の所謂龜甲形を見はせり、下腹の甲は扁平にして横紋あり、普通水龜と稱するは、雄は上甲低けれども雌は高し、冬は泥土中に蟄して四足及び首尾を甲中に藏し、春に至れば蟄を出で、水に入り、傍に人なきときは、石上に出で、甲を日に曝す、故に往々兒童の捕ふる所となることあり。

一種綠毛龜といへるは、形水龜に異ならざれども、甲に黃斑を有し、且つ三寸ばかりの細綠毛多く生じ、水中を行くときは、甲の後に靡きて恰も尾の生えたるが如し、島臺などに飾れる蓬萊の龜といへるは、之に象れるものにして、浦島太郎が龍宮に乗り行ける龜も、亦之を描きしもの、如し。

凡て龜は、丘に上りて卵を産み、身をもてよく地を堅めて、人知れぬやう蔽ひ匿す、此の産卵の場所の海水を去る遠近によりて、其の年の潮の高低を卜するを得と云ふ。

文學上の趣味 甲蟲三百六十四中神龜を以て長となすと、又水屬中龍を第一とし、龜を第二となすとも云へり、共に四靈の一なり。我が國にては、鶴と共に長壽の祥瑞として、婚禮の式上には必ず之を用ふ。

古は龜卜と云ふことあり、龜の下腹の甲を荆もて焼き、其の文によりて吉凶を卜せしなり。

支那の俗、龜及び鬼をいむこと甚だし、そは(キ)音をいむより來れるならんか。

河こしのみちのなか地の夕やみに 爲 家

なにそときけは龜のなくなる

ふりにけりいそのいはやに住む龜は 兼 定 卿

いく年なみをかさねきぬらん

河の瀬にうきたる龜のさし櫛は 光 俊 朝 臣

見し世なからのしるしなりけり

○長壽の意なり。

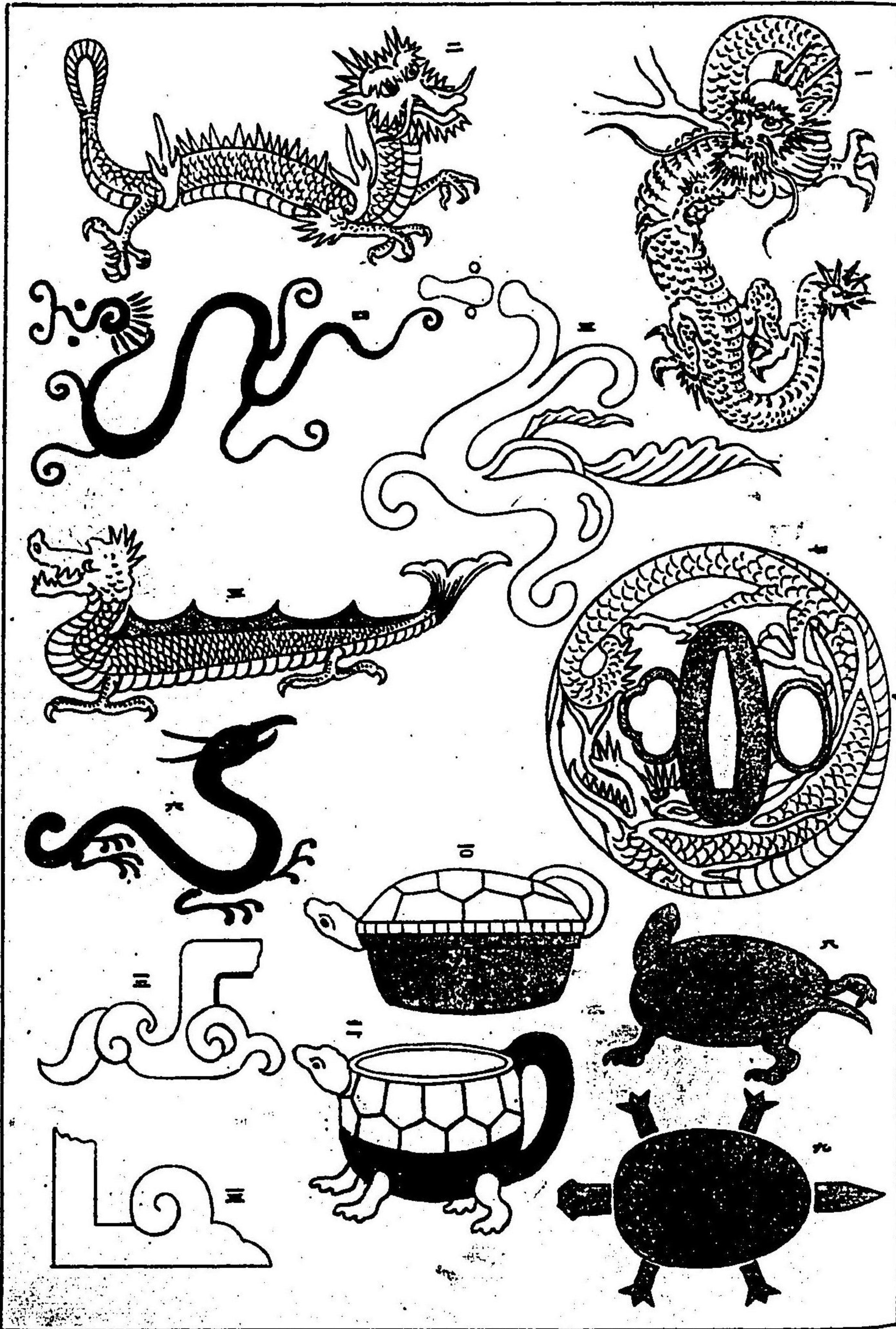
三 蟹

理學上の趣味 蟹は淡水・鹹水共に産し、兩手に鉗を具へ、八足ありて皆鋭き爪を有す、殻は堅くして厚けれども脆く、時々蛻して新殻を生ず、眼は外に出で、堅く、腹には横紋ありて巻き反りたる厚き臍あり、雌の臍は廣くして雄は狭し。

第一二圖

(一)(二)(三)(四)(五)(六)(七)(八)(九)(十)は龍にして(五)は筆架(七)は刀の鏝に龍を圖案せるものなり(一)(二)(三)は龜(四)は香合(六)は湯さまし(三)(三)は龜の脚を臺物の脚に圖案せるものなり。

第一二圖



蟹は直行すること能はざれども、横に走ること速なり、其の性に驚き易く、月明かなる夜は穴中に蟄して喰はざるが故に、肉落つれども、暗夜には穴を出て、飽食するを以て肥えたり。

文學上の趣味 一種平家蟹といふは、長門の海に産し、甲面は威き武者の面に似たり、こは昔平家の一族が千載の恨を呑んで壇の浦に戦歿せし時、其の靈蟹に化せしなりと云ひ傳ふ。

東海道名所の一なる鈴鹿の坂の下より二里半ばかりの處に蟹坂といへるあり、蟹の石塔を建てたり、むかし此處に妖怪現はれて人を悩ましけるが、或時一人の會解僧此處を過ぎんとせしに、忽ち彼の妖怪見はれたれども、僧少しもたじろく色なく、言靜かに、汝はそも何者ぞ、正體を現はせよと言ひければ、妖怪應へて曰く、我は兩手空を指し、雙眼天に光り、八足横行するものなりと、僧則ち悟りて、さればそは蟹にあらずやと言へば、妖怪即ち形を

蟹に復し、戒をさづかりて消え失せたり、これより妖怪の現はることなかりしと云ふ。此の石塔は此の蟹の妖怪を祀れるなりとぞ。

あしはらのかり田のおもにはひちりて 權僧正公朝

いなつきかにもよをわたるらん

横はしるあしまの蟹の雪ふけは 源 仲 正

あなさむけにやいそき隠るゝ

○噪ぐの意なり。

四 蛙

理學上の趣味 蛙には赤色のもの、褐色のもの、青色のもの等其の種類頗る多し、頭は三角形をなし、背廣く腹膨れ、頭の後部に眼を具へ、脚及び趾はさながら人類のものと同ならず。

蛙は兩棲類にして、水にも陸にも棲む、陸にありてはよく跳ね躍り、草木に上り、水に入りては善く鳴く、殊に五六月の頃雨降らんとするときは、幾十百の蛙喧しく鳴きて、田家一段の奇趣を添へたり。卵は水面に黒豆を流したるが如く、幾千となく浮べるを見る。卵は孵りて「おたまじゃくし」となり、魚類の如く鰓を以て呼吸するものなれども、後、二三度の變態を経て、完き蛙となるなり。或地方には、蛙をとりて食ふものあり、其の味美なりと云ふ。

文學上の趣味 花になくうぐひす水にすむかはづの聲をきけば、いきとしいけるもの、いづれか歌をよまざりける、(古今和歌集)

みくさ清きあぜの夕ぐれは、秋ならねども、あはれおほかれど、蛙といふものは、えせたるむしにて、人の足になれ来て、ともすれば、沓の下にしかれて、うでをひしがれ、身をあやぶむ律だつ

ひじりなどは、此の比はあしをとどむるも、むづかしき身なる
べし、(四季物語)

あまかへる鳴や梢のしるへとて 藤原長能集

ぬれなんものを行くやわかせこ

我やとにあひやとりしてすむ蛙 讀人しらす

よるになれはや物はかなしき

みかくれてすたく蛙のもろ聲に 良邈法師

さわきそわたる井手のうき草

あし曳の山吹の花散りにけり 藤原興風

井手のかはつは今やなくらむ

○喧噪の意又無益の勞の意に用ふ。

五 蝸牛

理學上の趣味 背上に渦狀の殻を負ひ、體は蛞蝓に似たり、頭上
に兩角を出すを以て蝸牛と名づけしなり。

冬は石垣の間或は土中に蟄れて寒を避け、春雨を得れば匍ひ
出で、草木に上り、晴るゝときは葉蔭に隠る、而して雨降らんと
するや、出で、二本の短き角と長き角とを延ばす、其の長き角の
先に眼あり、物音に驚けば、忽ち首尾共に殻中に縮む、常に香草を
嗜み、嫩芽を害す、歩むこと遅々として蛞蝓の如し。

文學上の趣味

牛の子にふまるな庭のかたつふり 寂蓮法師

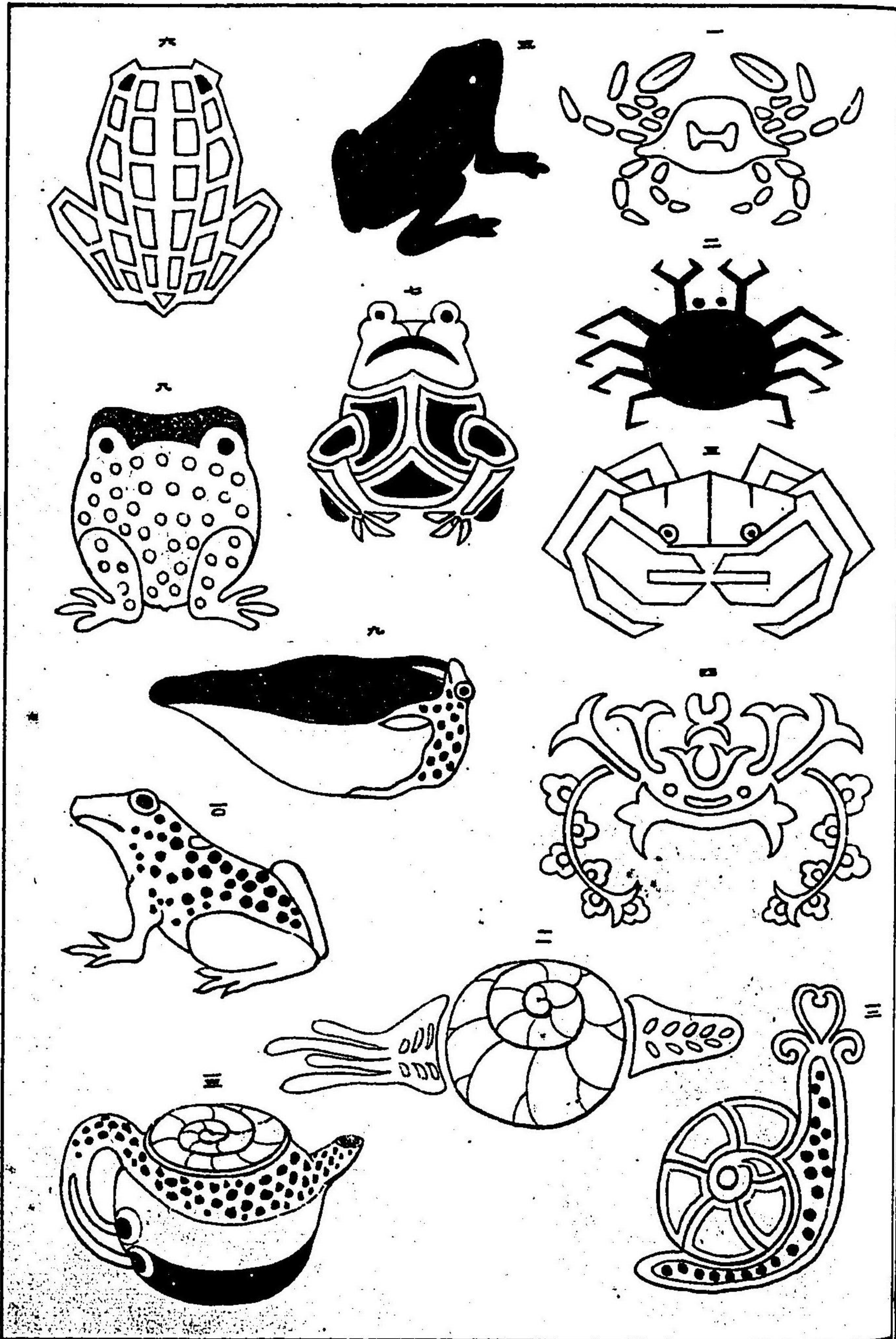
角あれはとて身をなたのみそ

家は捨すなにかなにはのかたつふり 藤原爲顯

つのかにありと身をたのむらん

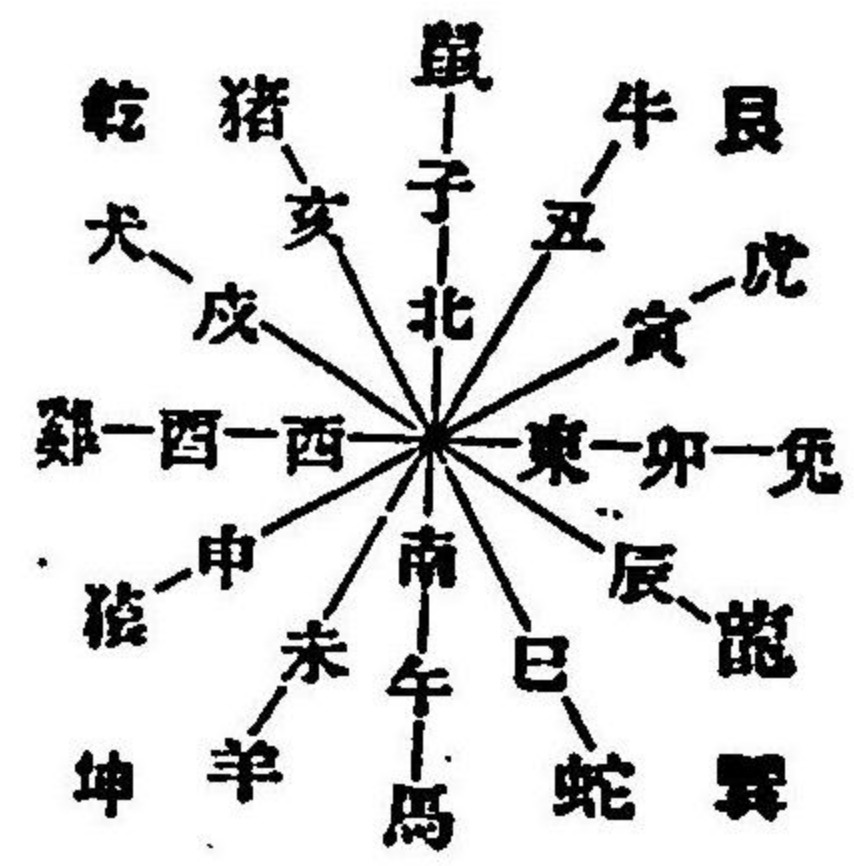
○虚勢の意なり。

第一三圖



第一三圖

(一)(二)(三)(四)は蟹にして(四)は蟹藤なり(五)(六)(七)(八)(九)は蛙(八)は箸立(九)は湯ま
まし(一〇)は水入なり(二)(三)は蝸牛にして(三)は急須なり



圖案新資料

以上述べたる諸動物中より十二支と方角とを
圖解せば上の如し。

午前の部

一	二	三	四	五	六	七	八	九
時	時	時	時	時	時	時	時	時
より	より	より	より	より	より	より	より	より
一	二	三	四	五	六	七	八	九
時	時	時	時	時	時	時	時	時
午	巳	辰	卯	寅	丑	子	亥	戌
の	の	の	の	の	の	の	の	の
刻	刻	刻	刻	刻	刻	刻	刻	刻

尙十二支を昔の時間に配當すれば左の如し。

午後の部

十九七五三一
一時時時時時
よよよよよ
りりりりり
十二十八六四二
一時時時時時
子亥戌酉申未
ののののの
刻刻刻刻刻

第六章 植物の部

一 櫻

理學上の趣味 櫻は種類多く、我が國到る處に生育す、花瓣・萼・雄蕊は皆五の倍数なり。彼岸櫻は最も早く開き、東京の上野・向島・江戸川などの櫻は、四月中旬を以て満開の時とす。五六月に至れば赤き豌豆大の實を結び、熟すれば黒紫色となる、其の味少しく甘苦し、小兒の喜びて弄ぶ所なり。一種奥州に産する大櫻の實は、直徑三四分に達し、味亦佳なり。およそ櫻類は高燥の地に適し、濕潤の處は宜しからず、之が良種を得んが爲には、接木法も盛んに行はる。

文學上の趣味 歐洲にては、薔薇を以て「花の王」となせども、我が國にては櫻を以て花の魁となせり、そは我が風土の櫻に適する

のみならず、陽春駘蕩の候、爛熳と咲き亂れて而も其の散る様の一種高潔なるは、まつたく我が大和心の美風と趣を同じうするものあるによるなり、さればこそ「花は櫻木、人は武士」と並び稱し、本居翁も

敷島の大和心を人とは、

朝日に匂ふ山櫻花

と咏まれたるなれ。

吉野の櫻は、先づ麓なる谿々より咲き初めて、奥の院なる峯に至り、中道と左右との谷やうやく咲きつゞき、其の間二ヶ月に亘る、美觀言ふべからず。貞室ほどの歌人も

これはこれとはかり花の吉野山

とのみ歌ひて、更に形容の句もなかりしとなん。

芳野山きえせぬ雪と見えつるは

讀人知らず

みねつゝき咲く櫻なりけり

東京上野の數多き櫻の中にて、誰人も知る秋色櫻は、其のかみ俳諧にて名を知られたる秋色が、十三歳のとき、

井のはたの櫻あふなし酒の酔

と詠みたるに由るなりと傳へらる。其の頃の櫻は疾く枯れ果てしかど、後人其の跡の堙滅せんををしみ、観音堂のあたりに絲櫻を植ゑて、今尙之を秋色櫻と呼びなせり。

世の中にたえて櫻のなかりせは

業

平

春の心は長閑ならまし

○高尚優美大和心の代表

二 梅

理學上の趣味 梅は櫻と同じく薔薇科に屬し、五瓣を常とすれ

ども、まゝ複瓣のものあり、白梅最も多く、紅梅は之に亞げり。萬樹枝枯れ、百花未だ發せざるに、毅然として霜雪を冒し、清楚高雅しかも芳香人を動かすの美花を開く、其の高節や誠に情夫をして奮起せしむるものあり、故に古は梅花を以て「花の王」とせしを、中古に至り、櫻に王位を奪はれ、纔かに「百花の兄」と稱せらるゝのみなるは、いかに口惜しき限りなり。

五月の頃實を結ぶ、其の味酸し、梅干として珍重せらる

文學上の趣味 梅に鶯を添へて詠めることは、鶯宿梅(拾遺和歌集中)の故事より始まれるなり。此のこと唐吉に見えたり、

勅なれはいともかしこし鶯の

宿はとゝはゝいかにこたへむ

此の歌は紀貫之の女(後ち内侍となる)己が家の庭なる紅梅に鶯の巢くひたるを、時の御帝、清涼殿の御苑に移し植ゑんと仰せ

いだされしとき咏みしものなり。是より鶯には多く梅を咏み合
せたり。筑前太宰府なる菅公の廟前に、玉垣もて圍はれたる飛梅
は、菅公筑前に貶せられし時、日頃愛玩し給ひし梅が枝に、

東風ふかはにほひおこせよ梅の花

主なしとて春な忘れそ

と咏じ、限りなき情をのこして別れたまひければ、心なき梅も、公
が情を慕ひけん、一夜のうちに公の庭に飛び移れるより、此の名
を得たるなりといふ。今は此の梅の仁を、宰府の御守として人に
分つなり。

水戸の常磐公園の梅は、其の數幾千株なるを知らず、こは名主
齊昭公が、維新の大業を鼓吹せん、の深慮より植ゑられたるもの
なり。それ梅は百花に先だちて開き、其の實を鹽藏せるものは、軍
用の好菜物となすべし、故に水戸藩は斯花に倣ひ、諸藩に先だち

て大義を唱ふべし、もし大事起らば、梅干を以て糧食の資となす
べしとの意に出でたるなりとぞ。余水戸に遊ぶこと前後三回、こ
の梅林を訪ふ毎に、公の義心に激勵せられざるなし。

大和月ヶ瀬の梅は、梅花山水を擁して天下の絶勝たり。臥龍梅
の名はいたる處に聞くこと多し、東都龜井戸の臥龍梅は、老幹透
迤、其の花は單瓣清白なり。余が郷里なる大分縣吉野村にも臥龍
梅あり、起伏半反歩に擴がり、花時には看客ひきもきれず、こゝに
芭蕉の句あり。

吉野く、かしこは櫻こゝは梅

芭

蕉

日數まつ春をおそしと白雪の

家

良

下より匂ふ梅のはつ花

春の夜のやみはあやなし梅の花

讀

人

不

色こそ見えね香やはかくるゝ

知

春のはな咲くともしらすみよしの、
やまにともまつ雪のみゆらん

貫

之

○高潔貞操の意なり。

三 松

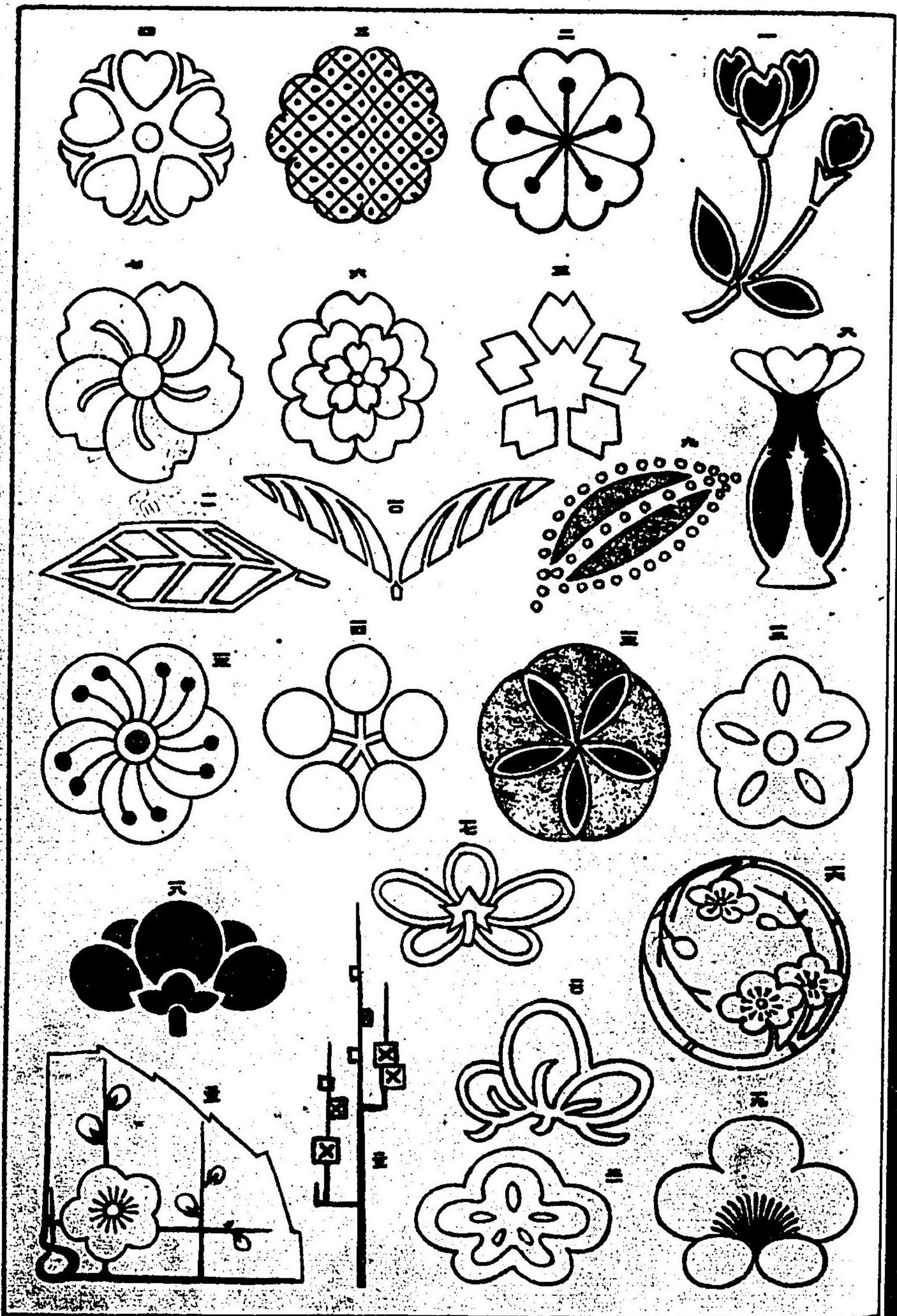
理學上の趣味 松は其の葉針狀にして、通常二葉よりなれども、
三葉松、五葉松などもありて、其の種類多し。

古は黒松は雄木にして、赤松は雌木なりと謂ひしかども、そは

第一四圖

- (一)より(二)までは櫻の圖案(六)は八重櫻(七)は捻ぢ櫻(八)は花瓶の立體圖案(九)
- (一〇)は葉の圖案なり(三)より(三)までは梅の圖案(三)は光琳梅(四)は梅鉢(五)は
- 捻ぢ梅(七)はうら梅蝶(三)は梅あげは蝶(三)は利休梅(三)は表紙圖案なり

第一四圖



誤りなり、此の樹は脂多くして樹皮面にまでもふき出づ、脂の地下に埋れたるもの幾百年を経れば、琥珀に化するといへり。

諸木、晩秋に至れば、其の葉凋落して、あはれ枯木にひとしき状を呈すれど、獨り松のみは緑の色を改めず、霜雪に屈せず、其の貞節や誠に慕はしさの極みなり、故に一名貞木又は貞松など稱せり。

文學上の趣味 松は百木の長にして陽木なり、其の性温にして厲しく、威ありて猛からず、これを望めば巍然として君子寛廣の徳あるが如し、百歳を経たるものは、其の枝横斜して、雅趣殊に愛すべし。

秦の始皇、曾て泰山に登りしとき、風雨暴に到りたれば、松樹の蔭に憩ひ、後に其の樹を封じて五大夫と爲せりと謂ふ、また十八公とも見えたり。我が國にては、古來松を吉祥のしるしとし、彼の

竹・梅と併せて、門松として歳首の祥瑞を祝す。

勝地にて松に名を得たるは、三保の松原・松島・天の橋立などを最とし、之に次ぐは須磨・舞子・明石などなり。唐崎の松、高砂の松は、聞くだに優美の感あり。

たれをかも知る人にせん高砂の 藤原おきかせ

松も昔の友ならなくに

しら浪のよりくる絲ををにすけて 重 之

風にしらふることひきの松

萬代をまつにそ君を祝ひつる 素 性 法 師

千年のかけにすまむと思へは

○長壽貞操の意を表はす。

四 竹

理學上の趣味 竹は東洋の特産にして、博物學者は之を禾本科植物となせり。性乾燥の地を好み、種類甚だ多し、其の主なるものを苦竹・淡竹・女竹・孟宗竹とす、對州産の竹は、匣三尺に達するものあり、用途亦甚だ廣し、竿となし、筧又は籬を造り、或は器具を造るべし。

文學上の趣味 そも竹の物たるや、啻に常緑にして延壽の相あるのみならず、風韵雅致に富めるを以て、彼の梅・松と並び、三友と稱せられ、又菊・蘭・梅と合せて四君子と唱へられ、冠婚・大饗の際には必ず缺くべからざるものとす。

我が國太古より竹を賞せしこと史に見えたり。畏しこくも宮様のたふときを竹の園生の末葉と呼び、伊勢神宮の御座所を竹の都と稱し、其の他宮殿の内にも竹の間と申し奉る貴き御間あり、鳳凰の間など、相並びていともかしこき宮居の一つとかや。

よにふれは言の葉のしけき吳竹の

讀火知らず

うきふしことに驚そなく

色かへぬ竹のみとりも埋もれて

俊成

千代をこめたるその、雪かな

月清き玉のみきりの吳竹に

定家

千代をならせる秋風そ吹く

勁節虚心無匹儔平生知己獨王猷

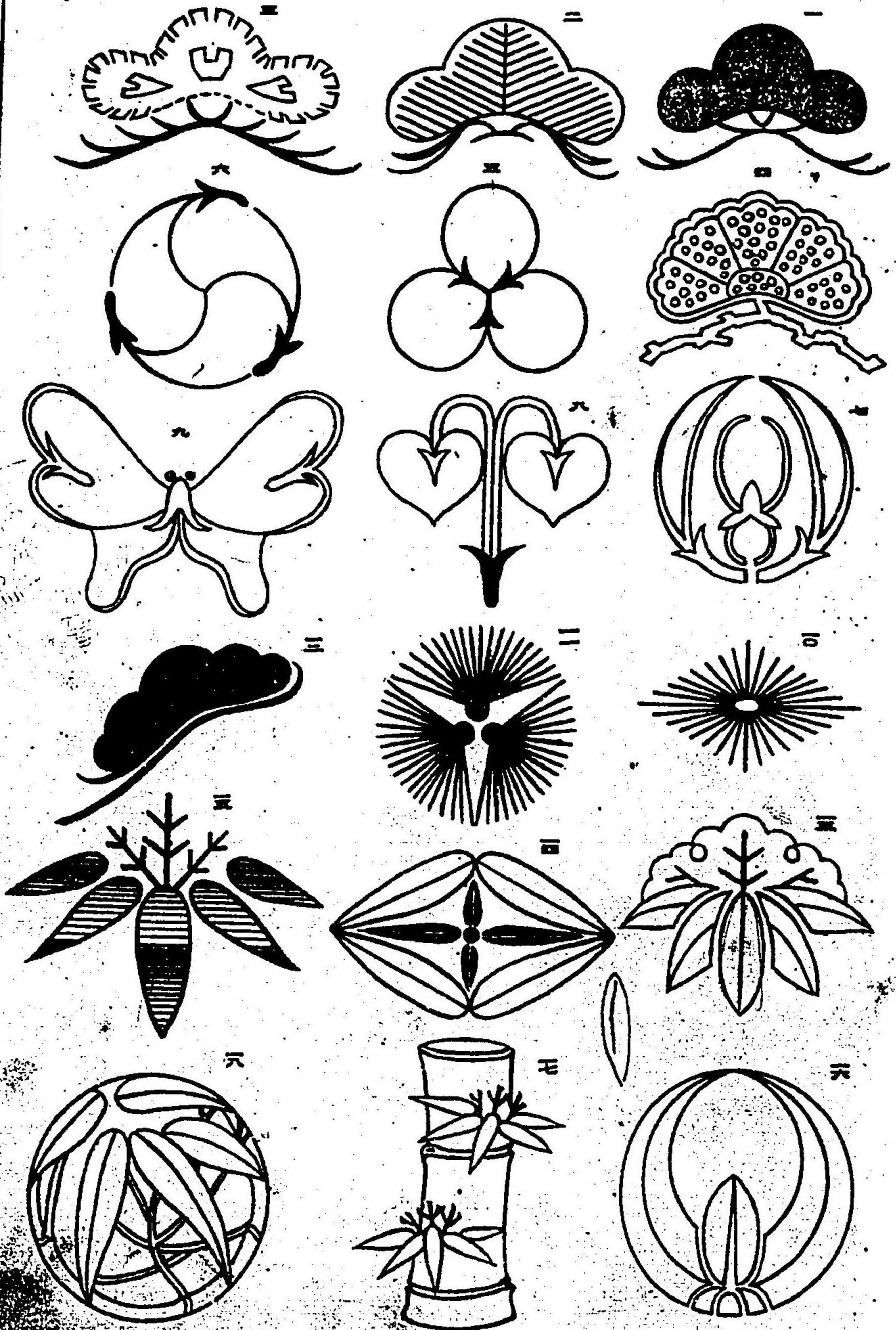
千紅萬紫凋零後 立向風前笑不休

○虚心真直の意を表はす。

第二五圖

(一)より(三)までは松の圖案(七)はふせん蝶(八)は二葉葵(九)はあげは蝶(三)より(六)までは竹の圖案(三)は雪持笹(四)は菱笹(六)は三まい笹

第一五圖



五 槭樹

理學上の趣味 楓又は雞冠木トウモロコシとも書く、本邦到る處に産す、中にも龍田川・高雄山など最も名高し、高さ二三丈、其の葉蛙の手に似て、五出又は七出す。五月の頃小さき黄色の花を開く、形亦飛蛙に似たり。晚秋霜を経て麗はしき紅葉をなす、蓋し紅葉は楓のみに非ざれども、其の嬋妍たる秀色は他に比すべきものなし、春の櫻を美とせば、秋の楓は雅なるべく、彼を豪美とせば、是は優美なるべし、

文學上の趣味 晚秋都下海晏寺の楓を観る

滿庭錦繡を晒すが如く、蒼海夕陽に映じては、又紅を濯ぐが如く、書院・僧房も其の色にかゝりやきて、愛賞の人と俱に醉色ならざるはなし

龍田川紅葉みたれてなかるめり

讀人不知

わたらは錦中やたえなん

みる人もなくて散りぬる奥山の

紀貫之

紅葉は夜の錦なりけり

○赤心又少女の愛に用ふることあり。

六月桂樹

理學上の趣味 常緑樹にして、古來ベネウス河畔に此の樹の森林ありたりと謂ひ傳ふ、我が國には稀に見る處なり。余は日比谷公園にて、東郷大將が日露戰勝記念として植ゑられしものを觀たり、葉は普通の肉桂に似て末端尖り、表裏共に色つやゝかにして對生す、花は小さくして黄色を呈し、短き花軸上に聚りて生ず、實は南天に似、三四五顆房をなして葉柄の根部に生じ、暗褐色を

なす、葉は矯味劑となし、實は外科藥として用ふべし。近時神社公園などに植ゑ付けられ、大いに世人の賞玩する所となれり。
文學上の趣味 一名多萬の木と呼ぶ、蓋し靈木の意ならん。支那の古説に、月中に桂樹あり、高さ五百丈に及ぶといひ傳ふ、又桂子月中より落つ、天香雲外に飄るとも讀まれて、真如の月と縁深きを説かれたり。古今集にも次ぎの歌あり。
久方の月の桂も秋はなほ
紅葉すればや照りまさるらむ
此の枝を曲げて輪を作り、花冠として榮譽の章となすこと廣く世界に行はる。近時我が國に此の月桂樹の意匠・圖案の多きは戰勝の餘榮の然らしむる處なるべし。

○光榮盛名の意に用ふ。

七 柿

理學上の趣味 柿は種類多し、花は美しからざれども、果實は其の味美なるを以て家々に植う、實は方なるあり、圓きあり、稍、扁きありて、大小一様ならず、皆形によりて名を異にし、又産する處によりて地名を以て呼ぶものあり、或は人を以て名づけしものあり。其の葉は降霜後鮮紅となり、頗る愛すべし。甘柿は生食すれども、澁柿は樽柿・干柿・吊し柿などとして食す、大垣・彦根其の他の地方にては、柿羊羹として盛んに賣出せり。余が郷里大分縣耶馬溪に産する卷柿といへるは、柿の核を去りて、肉の身をよく日に乾かし、之を繩にて紡錘狀に固く巻き、焚火の上に一二年間吊るし置き、黒く煤に染まれるをとりて料理す、珍味比類なし。一種黒柿といへるは、材質黒色の光澤ありて頗る好愛すべし。

文學上の趣味 柿は其の實・葉共に熟すれば「あかき」より、かきの名を得たるなり。

秋くれは山の木の葉のいかならむ 民部卿 爲家

そのふのかきは紅葉しにけり

世の中にあらしの風の吹きなから 源 仲 正

實をはのこせるかきのもみち葉

里深く柿の木持たぬ家もなし 芭 蕉

○繁殖又は余をして自然美中に置けとの意あり。

八 橘

理學上の趣味 橘は南海に多く産す、我が國にては紀州最も多し。樹は蜜柑に似て、高さ一二丈、枝多くして刺あり、葉は兩端尖れり、四月頃に白き花を開く、其の香愛すべし、實は杯に似て蜜柑よ

り稍、太く、表面凹凸なく極めて滑かなり、黄色に熟す、苞中に瓣ありて其の中に核を有す、味は甘酸し、花ははなたちばなと呼びて、古歌に詠めるもの多し。

文學上の趣味 「左近の櫻右近の橘」は、南殿の前に雙立して、其の香九重の裡に薰りしよし、平治の昔、源義平は平重盛を七匣りまで此の樹の周りを逐ひまはしたること史に見えたり。

駿河路や花橘も茶のにはひ
五月まつ花橘の香をかけは

芭蕉
讀人不知

第一六圖

(一)より(七)までは橘の圖案(五)は楓ざり(六)はふせん蝶(八)(九)は月桂樹の圖案(二)は柿の萼を電氣燈に作れるもの(三)は柿の實を急須に作れるもの(四)は柿の葉なり(四)より(七)までは橘の圖案(五)は杯橘(六)は橘てふなり

圖六一第



昔の人の袖の香そする

我宿の花たちはなのいつしかも

家 持 卿

たまにぬくへくそのみならなむ

○潔白又は美貌の意。

九 菊

理學上の趣味 菊は其の種類多く、春咲くもの夏咲くものあれども、秋の菊を最も優れりとす。瓣は管状のもの、舌状のものなどあり、色は黄・白・紅等様々なれども、我が國にては黄菊・白菊を愛づるもの多し、葉は缺刻深く、頗る變化に富めり、多くは一莖一輪のものを尙べど、近來種々の栽培法研究せられ、一株にして約一坪の面積に蔓り、千個の花を著くるものあり。東京團子坂の菊人形は、幕府時代より江戸名物の一として數へられたりしが、今は年

年衰へて、兩國國技館の菊人形に壓倒せられつゝあるは、惜しむべきことなり。

文學上の趣味 菊は竹・蘭・梅と相並びて、畫客の所謂四君子として賞する所なり。又彼の桐と共に皇室の御紋章とせられてかきこきこと限りなし、

菊壽童として、菊花の芳裡に遊べる天真爛漫の神仙は、千萬歳の長壽を保ち、自ら老の至るを識らざる嘉瑞の神なりといふ、

昔陶淵明は、重陽の節會に、芳酒を菊のかげに酌みて、塵世を避けたりといひ傳ふ、床しきことどもなり。其の故にや、菊を延壽客とも名づく。

櫻を「花の王」と呼び、梅を「花の兄」とし、更に菊を「花の弟」と呼びしは、何れも百花の長としてめでたし。殘菊霜を戴きて東籬に匂へる風情の雅美なる、實に烈女に比すべきものあり。

露なから折りてかさゝん菊の花

紀 友 則

おいせぬ秋の久しかるへき

けさ見ればさなから霜を戴きて

藤 原 基 俊

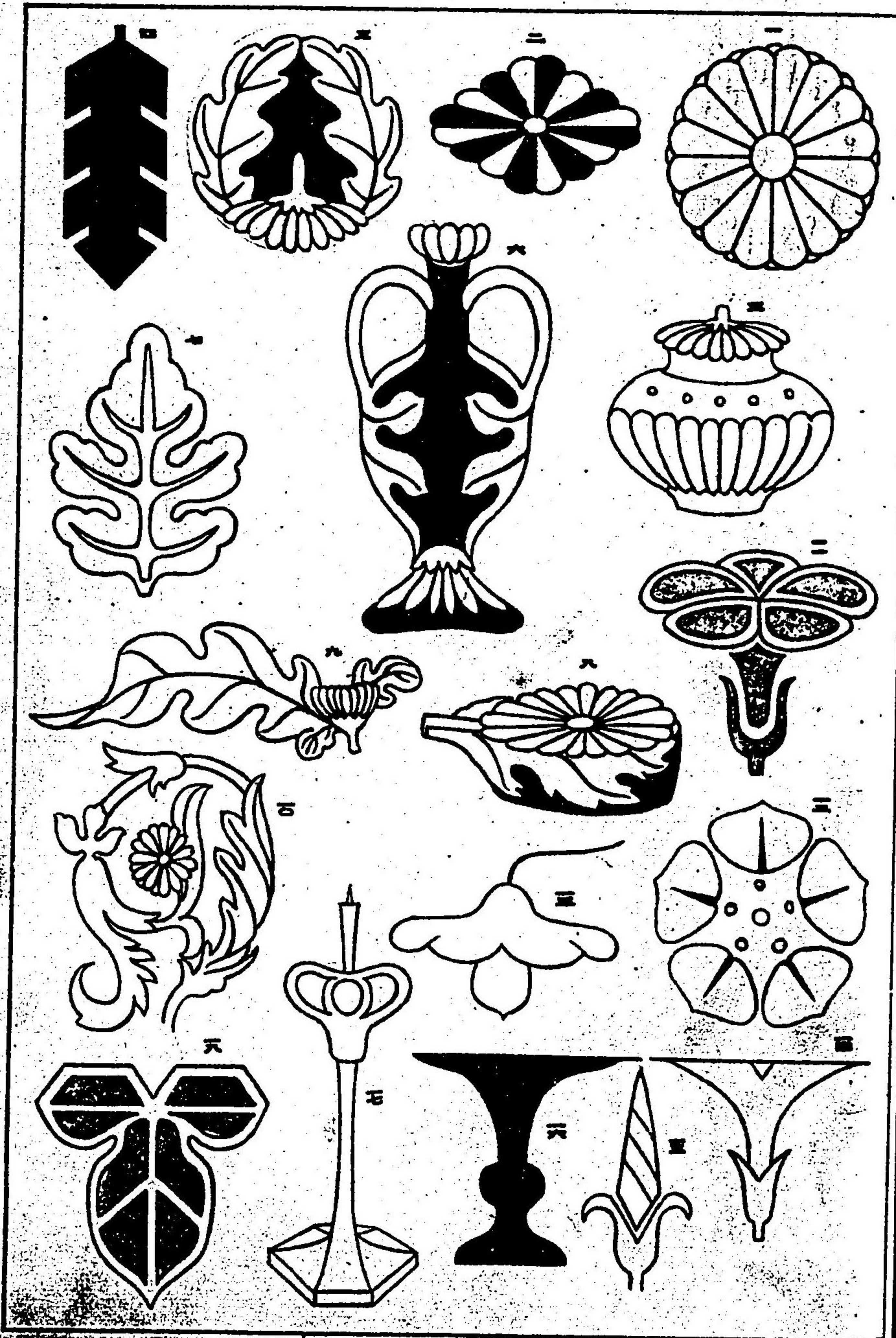
おきなさひ行く白菊のはな

○貞操高潔の意なり。

一〇 牽牛花

理學上の趣味 余、性來牽牛花を好み、毎年五月、珍らしき苗數種を選びて前庭に植ゑ、蔓の延ぶるがまゝに手を與へたりしが、長きは三間餘に及ぶものあり、肥料としては折々木灰を施すに過ぎず、七月上旬より咲き咲め、十一月中頃まで花を見たりき。

朝毎に鮮かに咲き亂れ、破れし垣根も瑠璃や瑪瑙の玉にて飾られたるが如く、朝の挨拶せんかと疑はるゝばかりの風情は、深



く愛づべきなり、花の形は漏斗状にして五瓣相合し、萼も亦五片にして細長なり、此の花の蕾は右巻きなれども、蔓は左巻きに他物に纏はり著く、朝の露と共に花開き、日中には早くも萎むなり、葉は深き缺刻を有し、三片又は五片に岐れ、或は全く缺刻なきもあり、東京にては、入谷の朝顔名高し、近來は人為淘汰によりて花及び葉の形の様々に變化せしもの多し。

文學上の趣味

第一七圖

(一)より(二)までは菊の圖案(五)は茶器(六)は花瓶(九)は表慶館陳列の筆架(八)は流行の水入(三)は外國圖案(二)より(六)までは朝顔の圖案(三)は花を電氣燈に作れるもの(六)は花瓶(七)は燭臺にして脚は花を倒にせるもの上部は實を便化せるものなり

朝顔の花にやとかる露の身は

相

模

のとかに物を思ふへきかは

空蟬の世のはかなさを思ふには

頓阿法師

なほあたらぬ朝顔のはな

朝顔に釣瓶とられてもらひ水

千代女

○短命の意に用ふ。

一一 牡丹

理學上の趣味 牡丹は一名木芍薬とも呼び、六月頃赤白紫等の花を開き、芍薬と艶を競ふ、根は薬用とすべし。

此の花は、保元の頃支那より渡り來れるものなりといふ。花の富貴なるものとして、今は到る處に栽培せらる。

文學上の趣味 牡丹は又ふかみくさ或は名取草ともいふ、唐の

牡丹は日本の獅子ぼたんなり、げに牡丹に唐獅子を添へたる繪畫彫刻等世に多きもうへなるかな。

名はかりは咲きても草のふかみ草 讀人不知

花の比とはいかてみてまし

夏木立庭の野すちの石のうへに 慈鎮和尚

みちていろこきふかみくさかな

閑來吟繞牡丹叢 花艷人生事略同

半雨半風三月内 多愁多病百年中

○安全の意に用ふることあり。

一二 水仙

理學上の趣味 水仙は梅椿と共に嚴寒中に花を開き、其の香も梅に劣らず、盛りも久しき、めづらしき植物なり。葉は細長くして

平行脈を有し、地上より二對の葉を生ずるを常とすれども中には五枚のものもあり、花の軸は高さ一尺餘に達す、花冠は、單瓣のものは六出し、内に黄色杯狀の内瓣あり、多く觀賞用として庭園に植う。

文學上の趣味 凜烈たる嚴寒を冒して花を開き、以て寂寥たる庭園を飾る、其の色香共に彼の梅花に匹儔すべきものなれども、皇國の歌に咏ぜられしこと、尠きは、眞に不遇と言ふべし。されど或は盆に植ゑ、或は插花となし、金殿玉樓中に咲き匂ふに至りては、餘花の遠く及ばざる風情あり。且つ近時應用圖案として器物に適用せられ、或は繪畫に描かるゝことの多くなれるは、聊か慰むるに足るものあるなるべし。水仙を金蓋銀臺と謂ふは、内瓣金色にして蓋の如く、外瓣銀色にして臺狀をなせるが故ならん。昔一人の王子あり、風景絶佳なる山中の湖水に己が姿を映し、

其の美しさに自惚れて、遂に水仙に化け果てたりといふ、信ずべきにあらねど、水仙を以て自惚心に譬へたるは面白し。

水仙や美人かうへをいたむらし 燕 村

水仙や切らむとすれは手の狂ふ 川 長

寒燈はうすれて消えて水仙の 讀 人 不 知

花の香さむう人ゆめにいる

誰か魂とさめてそ思ふあけかたの 讀 人 不 知

香爐になるとなる水仙のはな

○自尊自惚の意に用ふ。

一三 百合

理學上の趣味 百合は野生のものと栽培するものとあり。莖は眞直にして長さ二三尺、葉は短き竹の葉に似て長く、莖の周圍に

互生す、五六月頃六瓣の花を開きて旁に向ふ、長さ四寸許り、瓣の本は聚つて筒の如く、末は開いて反卷す。花落ちてのち卵状の實を結ぶ、其の根は白色にして瓣多く並び重なりて蓮花の状をなす、食用に供するものと、薬用に供するものとあり。

文學上の趣味 ゆりの名は、ゆすり、即ち動くの意に由來す、蓋し花大に莖細く、風のために動くこと甚だしきがゆゑなり。伊太利及び西班牙にては、白き百合の花を以て聖母の純潔を表はし、其の祭壇を飾るに用ふ。

夏の野のしけみにさける姫百合の 坂 上 郎 女
知られぬ戀はくるしきものを

庭のおものつちさへさくる夏の日に 土御門院御製
ひとりつゆけき姫ゆりの花

○純潔溫和の意あり。

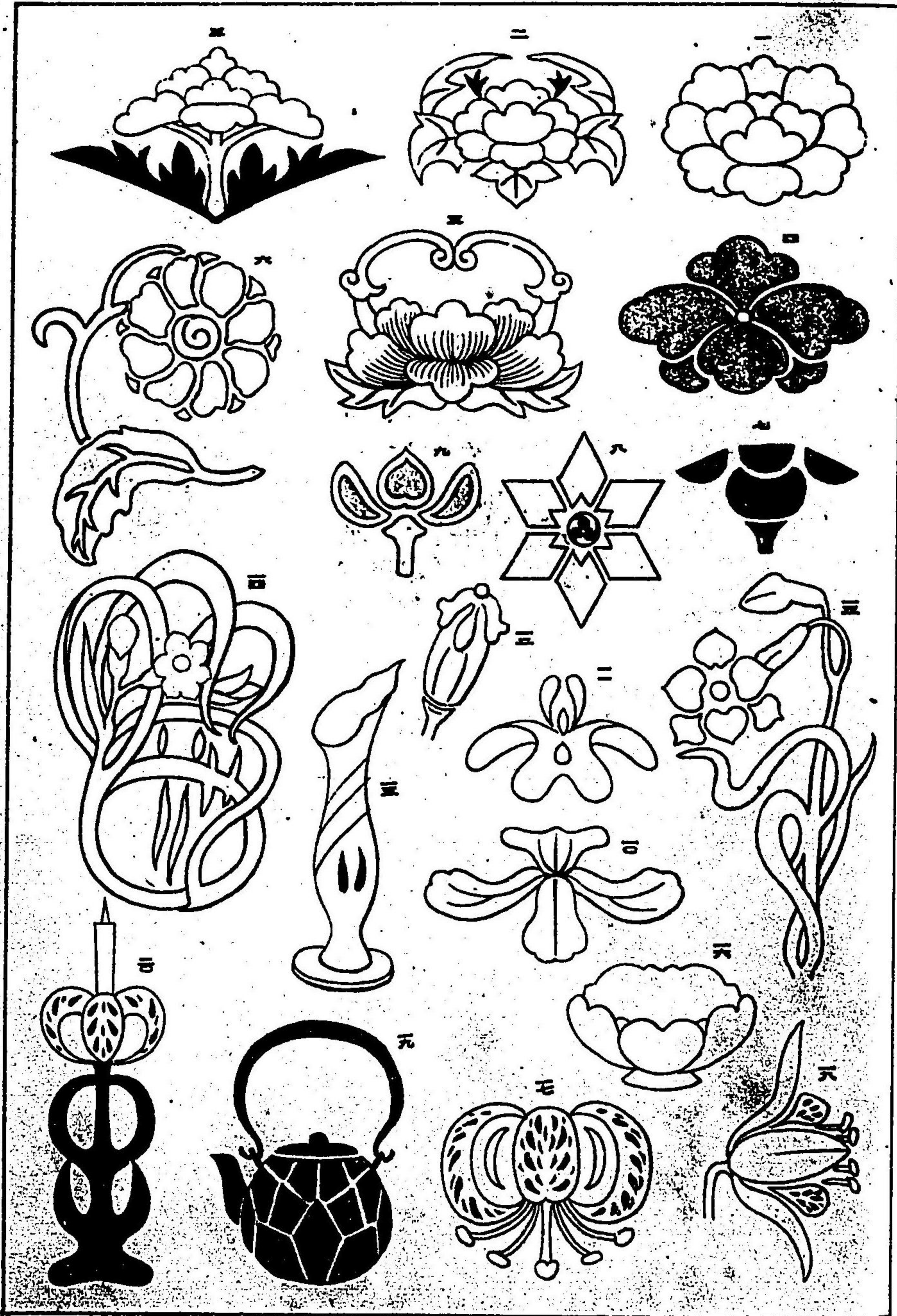
一四 燕子花

理學上の趣味 燕子花は又杜若とも書く、菖蒲、いちはつ皆同類に屬し、甚だ鑑別し難し。多く池沼に生じ、葉は劔の如くにして厚く、花には白と紫とあり、五月頃筆の穂に似たる蕾を出し、其の開く様恰も三瓣舌を巻き反すが如く三方に擴がり、内に亦三の細長く立てる瓣を見る、其の雅美なる、池中の佳人と稱すべし。今や世界何れの國にも、此の花を見ざるなきに至れり。

第一八圖

(一)より(六)までは牡丹の圖案(二)は蟹牡丹(三)は菱牡丹(四)は手懸(五)は外國圖案なり(七)より(八)までは水仙の圖案(九)は最新流行の玻璃製花瓶(一〇)は花を盃に考案せるもの(一一)より(一二)までは百合の圖案(一三)は百合の根を鐵瓶に作れるもの(一四)は燭臺に圖案せるものなり

圖八一第



文學上の趣味

むらさきの色にそそまる杜若

師

時

いけのぬなはのはひかへりつゝ

かきつはたにほふ川邊のたひ衣

家

隆

このしたかけもたちそやられぬ

雨降りて更に涼し、燕子花

蘆

風

○使命音信の意を表はす。

一〇 蒲公英

蒲公英

理學上の趣味 原野路傍に甚だ多く、葉は冬季より盛んに生じ、地に平みつきて叢生す、形兩頭鋸の溝深きに似て、之を切れば切口より白汁を分泌す。二三月頃圓き莖數條を出し、高さ五寸許りにして、頂に黄色の一花を開く、形小さき菊の花の如し、落花後白

絮を有する種子を戴き、風に從つて蚊の如く飛ぶ、或地方にては蒲公英の若きをとりてあへもの汁などに料理して食す、食毒を消し、氣を散ずるものなりといへり。

文學上の趣味

蒲公英や折々さますてふの夢

千代女

蒲公英に月の靜かなる堤かな

手心

○薄情神託の意なり。

一六 莖

理學上の趣味 莖は、山野路傍等に生え、長さ三四寸に達す、葉は稍、橢圓形にして細長き葉柄を有し、根部より數條簇り生ず、花には紫のものと白きものとありて五瓣花なり、即ち其の中一瓣は下に垂れて距と稱する囊状のものを具ふ、小兒は距と距とを交

み合せて互に引き合ひて、角力さす故に、俗に「すまふとりぐさ」とも稱す、實は麥粒よりも稍、大なる苞状をなし、内に微細なる種子を蓄ふ。

文學上の趣味 「都府樓の跡訪れば残る莖の二つ三つ」とは、誰が咏みし歌ならん、奇しくも廢墟の面影を言ひ表はされたるものぞかし、其の花の鮮かにしてはづかしげに首をうなだれたる姿、未だ世の塵に染まざる處女にさも似てゆかし。近時すみれ白粉すみれ香水など、世に持てはやさるるは、其の無垢なる操をとれるならん。

紫の花なつかしむむさし野の

宜長

くさは見なからすみれともかな

むかし見しいもか垣ねはあれにけり 權大納言公實卿

つはなましりの莖のみして

いその神ふる野の里をきてみれば 小侍 従

ひとりすみれの花さきにけり

○貞節、謙讓、愛の意を有す。

一七 藤

理學上の趣味 人家に植うるものと、山野に生ずるものとあり、
蔓は頗る堅靱にして、太きは匝り三尺に達す、花は蝶形花に屬し、
白・紫の二種ありて房をなし、長く垂る。河内國刈田村なる某家に
あるものは紫花にして、長さ五六尺に及ぶといふ。白色のものは
一般に穂短く、開くことも早し、實は莢をなし、形刀豆の如くして
小なり、内に扁圓にして、基石に似たる豆あり、炒れば味栗の如し
といふ。

文學上の趣味 池畔の古木に纏繞したる藤の、窈窕たる花房を

水面に映じたる風情は、そゞろに人をして恍惚たらしむるもの
あり、花言はざれども下自ら瓔珞世界を現出すとは、蓋し此等の
光景を形容せしものなるべし。

我が宿にさける藤浪たちかへり しみ つね

すきかてにのみ人のみるらん

ふちの花あたに散りなはときはなる 貫 之

松にたゝへるかひやなからん

にこりなききよたき川の清ければ 忠 峯

そこよりさくとみゆる藤なみ

○歓迎又は依頼の意に用ふ。

一八 石竹

理學上の趣味 此の草は、多く山野に自生し、葉は細長くして深

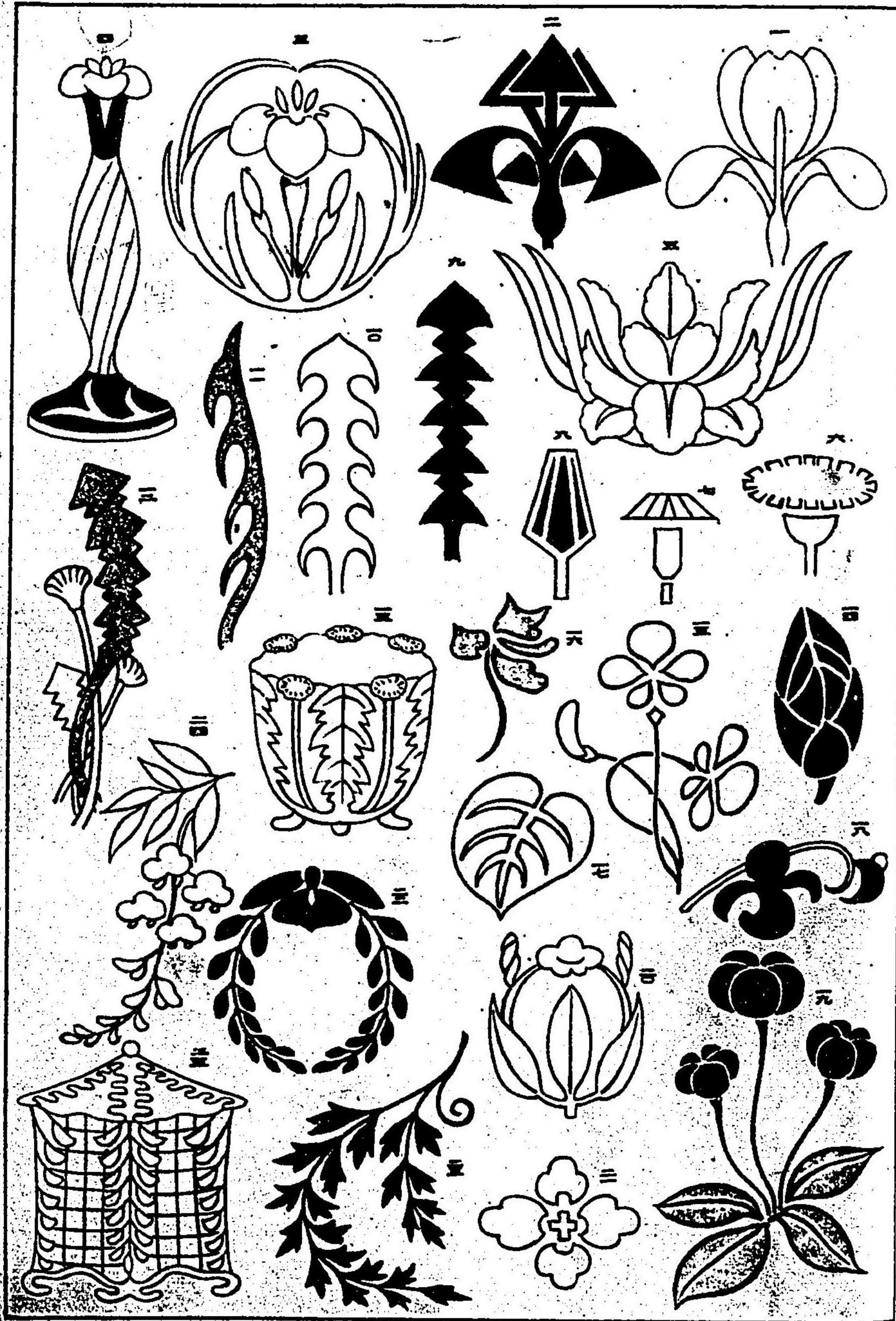
緑色を帯び、相對生す、莖の高さは凡そ一尺、夏秋の比花を開く、野生のものは淡紅色なれども、庭園に植うるものは大抵紅紫色を呈す、落花後小圓長角の實を結び、内に小扁の黒子あり、熟すれば角頂自ら開き、風に從つて種子を散布す、花壇などに植ゑてまことに可愛らしき花なり。

文學上の趣味　なでしこ、一名かはなでしことも謂ひ、古來我が國人のいみじう愛する處なり。田野に生ずるものをなでしこ

第一九圖

(一)より(五)までは燕子花(四)は花瓶(六)より(三)までは蒲公英(三)は蒲公英の花と葉とにて茶碗に作れるもの(四)より(三)までは莖(四)は花を便化せるもの(三)より(三)までは藤の圖案(三)は菱藤(三)は下り藤(三)は藤の花にて吊燈籠を考案せるものなり

第一九圖



稱し、瞿麥の字を用ひ、人家に栽うるものを石竹と書き、其の字の音を以て讀むなり。

ちりをたにすへしとそ思ふさきしより み つ ね

いもとわかぬるとこ夏の花

かひなきはおなしかきほにおふれとも 和泉式部集

よそふるからのなてしこの花

なてしこか花見る毎に少女らか 家 持

ゑまひの匂ひおもほゆるかな

○清淨なる愛の意なり。

一九 蓮

理學上の趣味 蓮は泥に生じ、赤・白の二種あり、葉は圓形にして廣く笠の如し、花は瓣々相重なり、艷麗比なし、早きは六月頃より